

雅  
潤  
錄

七

昭和貳年九月上浣起筆

特別  
14  
1919  
396

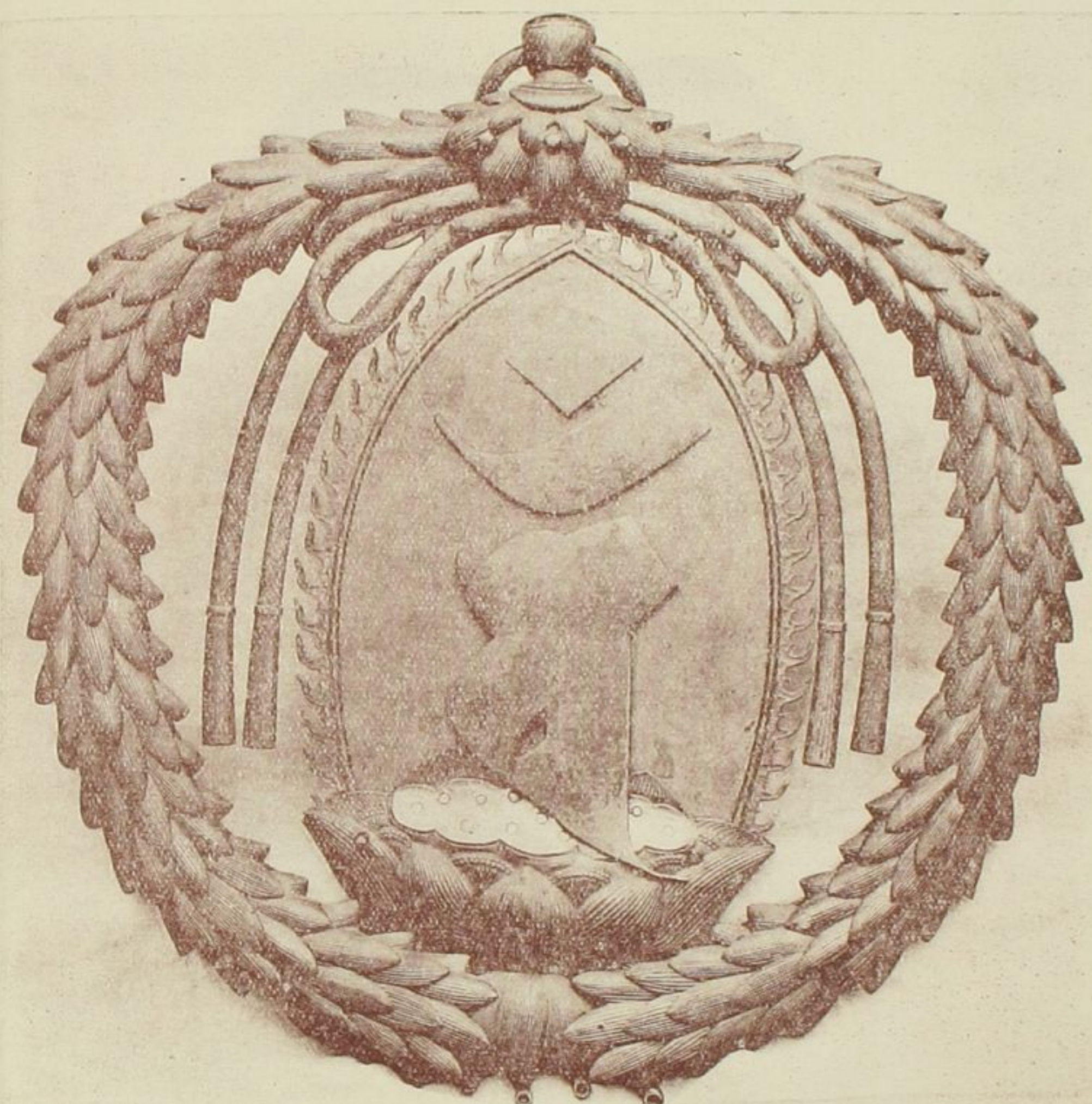




雅間録

昭和二年九月七日起筆

の此数の早大の... 送致す、来十月後長任の  
 満了につき次きの後長を承るる面倒あり、  
 田中切りの辞意を云くも後任を定むるこ  
 と甚に困難也、後田中一の二者其一を承  
 るおろけの事ある一者一程あり、大母の由の  
 のる物、今直ちある者の一を推すこと容易  
 るるあり、これを視後長ゆ任の云ふる、七月  
 頃ら、由を遂行し、凝滞せしめん、名未



(寶國) 鬘華銅金

〳日氏眞秀りな一の内の個數鬘華るす蔵の社神主兵はるたげ揚に、こ  
 「りた似に輪花の樹桂月らがなさは鬘華の此、子種の來如日大は字梵」



まゝ、田中を捕まへしと母方の徳長顧問と  
らるるし、あちも出たんが塩屋内、田中の  
徳長を捕まへし、のり付もあつた。他も田中  
を捕まへる向もあつた。田滑を捕まへて来ら  
く、一時の維持おる中、のち名おるおれ、合  
し、その後の次第も、先決問題として、高  
の辭任も、可成り減して、校友側を代  
志の松本伯増田海を、昔、高の徳長の主  
任説を主張し、徳長は病あつたと云く、もあ  
の校友の意見を認める、と深からず、連年の  
心算も、二度方いさる事、さうさ、他、徳長を  
挙げ、田滑を運ばせる上、再び起はる

この外、一といふは、金を採内り、高の日の  
為の辭任に、こを得ると主張し、たのみ、他  
の二名の内、一人を、着る、の、難きを、知らざる、あ  
ら、ん、が、路を、辭任、の、友、祖、も、出来、か、さ、く、協  
議、の、今、一、行、説、の、た、つ、き、止、む、さ、く、余、も、  
一、提、案、も、あ、り、徳、長、に、一、年、間、静、養、の、也  
一、あ、る、の、條、件、の、も、再、任、す、べ、し、其、の、勸、養  
の、間、の、田、中、理、を、徳、長、の、代、起、と、あ、す、べ、し  
え、思、海、に、格、を、し、こ、と、得、さ、る、の、方、法、と、あ、す、べ、し、  
今、日、お、し、と、な、る、事、實、田、中、理、を、考、へ、校、長  
に、あ、り、し、る、こ、と、も、あ、る、事、實、に、格、を、差、支、  
ら、る、事、實、に、あ、り、し、る、事、實、に、格、を、差、支、



外に異論もあるものといふは、松平場田  
海を、まゝ、多んらう目しかんと言ふは金子  
山本池田堀の社敷成を、青し、うを、高田も  
に、あ、う、今、う、静、岩、約、河、の、校、敷、と、興、ら、す  
といふ条件をも可とも、は、に、あ、ら、う、ま、え、に、従、ふ、べ  
し、と、決、意、を、決、ら、し、ら、う、を、別、号、日、高、田、と、余  
田中、と、今、う、と、前、庭、内、儀、の、治、平、と、報、じ、給、ふ、給、ふ  
を、代、理、と、し、し、と、説、き、ら、う、を、更、ま、異、議、ら、う、  
不、考、ら、う、と、代、理、も、つ、と、と、く、し、と、あ、ま、の、早、速、に、  
快、活、し、ら、う、に、因、り、数、月、苦、心、し、ら、う、難、件、に、漸  
や、う、活、路、を、見、ら、う、此、上、に、維、持、負、合、ら、う、松、平、場、田  
は、ま、ま、と、重、任、と、提、議、し、ま、え、に、異、論、の、起、る

へ、ま、ま、と、現、在、合、ら、う、松、平、場、田、の、條、件、を、六、合、の、  
互、進、す、べ、し、即、ち、可、也  
曰、松、平、場、田、の、事、に、余、擔、任、の、然、り、ま、一、ち、が  
實、地、を、換、し、現、在、建、ら、う、を、天神山、に、も  
他、に、移、す、の、必、要、の、あ、ら、う、つ、き、地、を、松、平、山  
に、お、し、ら、う、或、は、松、平、山、の、地、形、を、可、ら、う、い、ふ、も  
丘陵、の、地、域、狭、く、し、社、敷、を、造、ら、う、能、い、ま  
あ、ら、う、と、地、に、此、れ、を、不、任、意、に、圍、内、に、無、き、ま  
よう、に、い、ふ、ら、う、土、を、盛、つ、と、地、を、換、ら、う、  
の、外、に、う、と、し、と、校、の、主、合、の、上、に、う、と  
命、し、ら、う、社、敷、を、う、と、見、ら、う、あ、ま、の、大、き、く、  
廟、を、削、つ、と、見、ら、う、か、ら、う、神、体、を、つ、と、所、型



のこころ、三區に分かれ居り、中央廣らく、左右や、  
狭く、せ、二廊あり、其前、神鏡を供するの壇  
あり、その前、氏名帳を納むる厨子をつまぐ  
べしと一應、二区、し、左方のもの、厨子の  
注文、まゝとんとし、右方の、定地をえん、  
厨子と心るの、必要あり、神体とて鏡を中  
央に置き、左右の、宮に氏名帳を収める方却  
て、よしとあり、厨子を心る、こと、い、又、い、す、こ  
と、う、り、り、但し、几帳を改定、し、三社、又、こ、ら  
ある、こと、の、と、取、替、社、殿、入、ら、る、几、帳、を、掲、げ、  
大、要、を、感、し、ま、ん、く、神、物、を、の、ま、を、余、換、任  
し、り、又、あ、り、あ、山、の、石、工、を、招、き、社、殿、の、前、に

一、對の石燈、これと建、つ、ま、其の、型、と、高、く、し  
其、等、を、定、め、ら、る、型、の、春日、の、西、の、屋、（別り、葺）  
葺、の、際、刻、を、渡、す、こと、高、と、六、尺、を、入、り、  
こと、を、決、し、招、魂、殿、記、を、刻、目、し、て、一  
石、を、社、側、に、立、る、件、に、付、て、（園、内、に、も、南  
の、ま、石、あ、る、を、見、え、し、ら、る、ま、つ、ま、ん、と、採、用  
す、こと、と、し、ら、る、也、)

（九月七日記）

○、貞、日、操、帯、し、貞、操、鏡、ウ、イ、ナ、ス、世、帯、（五、二、）、（格、子、）  
べ、れ、が、鏡、（帯、）、ま、く、の、名、い、あ、ん、ま、（皆、性、的、極、端、を、）  
好、け、る、目、的、の、器、官、を、お、す、る、の、具、と、し、ら、る、の、心、あ、る、  
こ、ん、と、世、界、の、各、方、面、に、行、り、ん、て、あ、る、こ、と、と、見、入、る、  
支、那、の、無、倫、あ、る、貞、操、帯、の、後、を、想、ひ、し、







画一なる形つらうしにせよとあるとれあるのあつたが、  
 鏡も七鏡の良人の必携つてゐる所から、此の様式  
 を考ふるに、<sup>實</sup>なるに、正副二あるの鏡を必り、副の  
 方を高<sup>價</sup>其の婦人に賣りつけさうとあるといふが  
 今のコンナものを<sup>先</sup>知る事して賣つてゐるものがある  
 とするに、無論リコナ融<sup>融</sup>を考へてゐるが、  
~~日本は長巻具に於ての記載があるけれども、此~~  
 とは及んば、<sup>近世</sup>の西洋輸入があるに、  
 日本は<sup>要するに</sup>、<sup>書</sup>の時代の  
 遺風もあつたこと、<sup>ウエニス</sup>の  
 ことからウニス板子の名がある、ベルガとウエニスの風  
 とするの、ベルガが<sup>鏡</sup>の、<sup>ウイン</sup>

や巴里の、今も物も、<sup>所</sup>の、<sup>九</sup>  
 月七日録



の今柳多田茂の店員も扱き扱認殿に七の玉の

神鏡、まんと納あぶき柳葉、まんとあまのりまのり  
器下のまをオを形のここと注又ま、三社左衣の二  
社まのあの唐櫃を白木杵杖を伴う、まんと  
氏名帳を納あぶきこことし、まんと注又し畢の三  
社に揚ぐべき几帳の純白無紋の絹を好む、大藤  
の入口の朽木杵杖の几帳をか、けのこことし、朽  
木の形式と色見を製こ入らざるこことし、特に朽木  
杵杖をあるまを考へ、まんと扱のこことし、  
此、氏名を扱あぶき折帳の京都の山本四春  
堂より見積書別紙、全部まんに転こす方  
手紙の書けまを考へ、まんと扱するこことし  
也



高田の店員の語るを聞くに乃木神社  
の神体は大物のい自殺に用ひる俣の  
支人のい其母所有の鏡をえりてあると  
せえり。九文の根魂社の合祀人名の  
記古夫張る唐櫃に納めあるなり也  
此の根魂社の神饌も善る(の例を  
破りせし程の多き事の上より善  
道用あたる) 鯨皮、牛の鑑鼓、軍用  
かま、ハこるんども供するより一  
あつて而らく感せられた甘酒も供  
物中のあることとせへり  
伊勢太廟の供饌ハなるま形式に拘りて

仕方の酒の杯に注ぎ、へらおの重鼓のものを  
カワラケス多んく取りらけて捧けるよめて  
あることハ初めてややくことである

社殿の方位に就てハ何故か西と北の向のを忌む  
が早稲田のみ是山の形勢からするに北の向に  
より外に後方があり、すこし七ちり西北を  
向けることハ出来ぬも知らんが、方位論する處角  
辯りてせらるる



○九月十日 今朝五時より始 砲一發大内山の御  
共文事と傳ふ六時以号外の敷きより午三時内親  
王御降延を知り毎朝拂儀記奉を多々  
相日日の生に似し時を記奉し  
す七時より午三時迄相日漸々達す入開しと見  
九い首部と御名を記しあり四時四十二分  
後印刷ししことあり通達の意味を  
ある。新書の進歩即ち印刷術の進歩  
えり就て見るを得べき歟想ふ才一皇  
御降延の事も其の御印の事も其の御  
儀の中にも御名を記しあり  
| 今更に御名を記しし時



夜に多分と申すの  
為果に甚く重し  
議し而して相  
社の評議何事か  
く、前田も評議  
回或は評議と  
の言の如く  
○昨日全従業員  
の形式を  
重なる  
あり、若し  
お措かば  
つとを

○昨日全従業員と  
の形式を  
重なる  
あり、若し  
お措かば  
つとを

一、全従業員  
林六名を  
出し、八  
地等  
務し  
社外  
提出  
出の  
余  
社  
各社  
を



全日従業員の日給成り... 内果く  
核先を前よりべしと大体を定めても昨日  
まじ持重するも不の女... 昨日  
其儘に済む

九月十日記

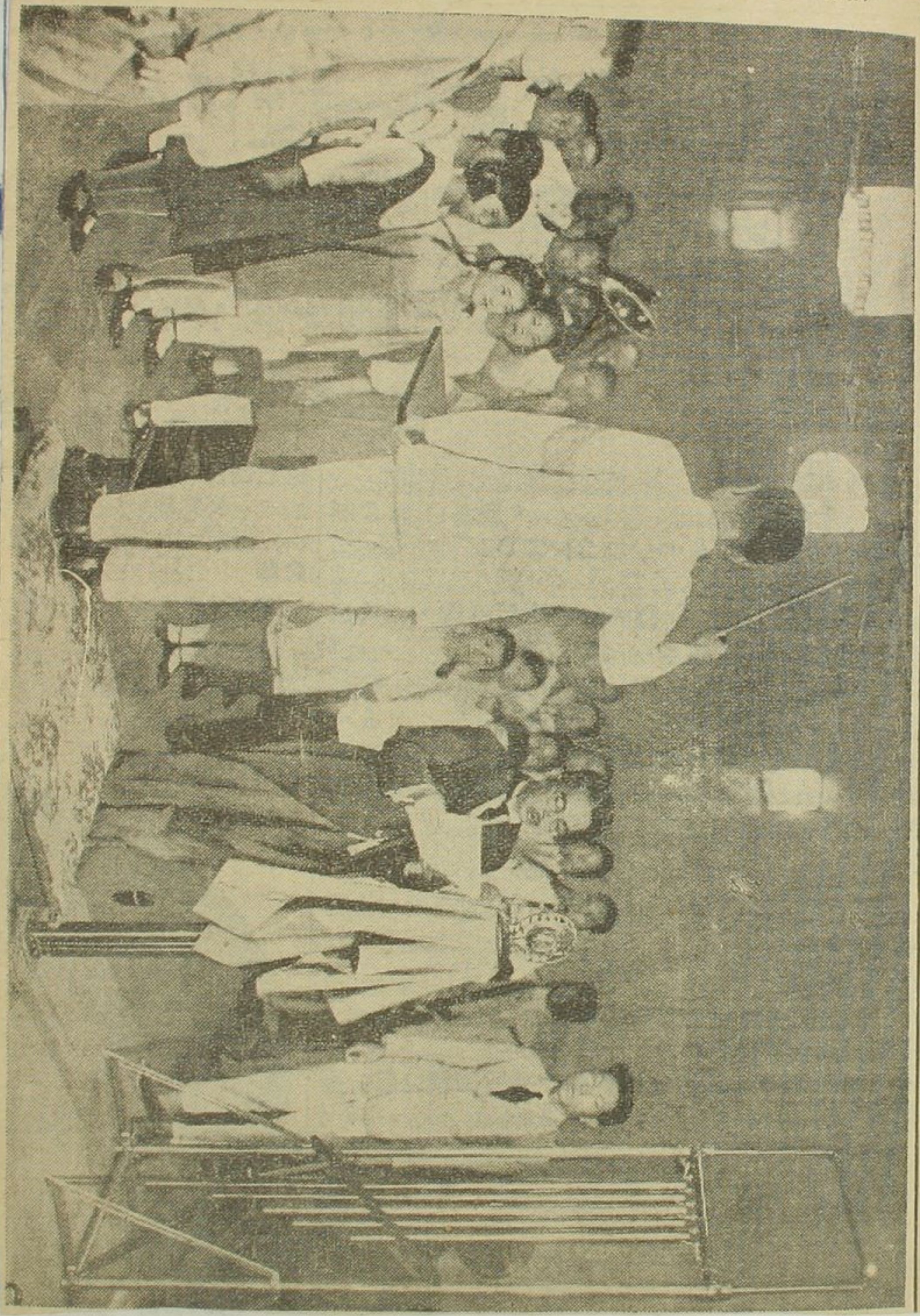
昨日の全社の問題... 出社... 不良分子  
を家合するの別... 笑話... 地  
四五背後... 一五不良...  
之れと速... 理由...  
を解雇... 解  
雇... 俵銭を掛...  
十二行

得るも... 核... 不良の全部... 形式...  
解雇... 全体... 差...  
... 彼等... 亦微...  
し、解雇の... 先...  
た... 其の  
聴... 内容... 解雇  
此... 内容...  
方を突... 勿論...  
等を解雇... 労働...  
と



報に「いよいよさかん、秋田の準備ハ勿論である、  
 ことを得たといふ、壁の平肌、此方をも出るハよろ  
 しくからず、社の内外に驚くとも出来る限り、  
 沢田熊吉を廻り、といふは略々決す、  
 九月十日記  
 〇若くは波の新居を築く所、  
 川々に橋を、柳やきき、  
 新居を形築くと、遺域を、  
 せむおとあう

九月十日記



曉に喜びの合唱  
マイクrohンの前に

この日、この朝、JOKKのアナウンサー  
 オ、ア、ンは、ハ、御座ると、際、  
 分、放、送、部、長、が、マイクrohンの前に立って、  
 とも、謙、遜、な、態度、で、  
 十二分、鐘、分、鐘、内、親、王、殿、下、御、座、生、あ、ら、せ、ら、れ、御、二、方  
 とも、御、健、や、か、に、あ、ら、せ、ら、れ、ま、す、と、放、送、を、終、つ、た、  
 續、い、て、奉、祝、の、君、々、代、を、合、唱、す、る、芝、崎、小、學、校、の、女、生  
 徒、朝、月、上、し、子、さん、外、十、四、名、は、去、月、廿、日、以、來、こ、の、  
 前、四、時、電、話、の、あ、る、見、童、の、家、に、  
 飛、ん、で、勝、ひ、合、せ、て、放、送、局、へ、小、野、副、等、の、指、揮、で、自、出、度、  
 放、送、を、終、つ、た、【喜、典、は、矢、部、放、送、部、長、と、少、女、達】



○新築に二回以上の火災金を要しつゝなつとき  
初めに花巻全部を売却し決しなむを賣主の時  
助を十月と協定しつゝなつとき夏中に準ずる  
為とす打合せのときは追々時々の手  
まゝ、是れ手配を為さぬは、先づ吉野の手  
を日毎に油を印刷せぬとす  
て漸く、吉野と打合せをなす、先づ吉野  
を四全部一個石の互き組合せをなす  
るに、ぬこのときは是れ、是れ、是れ、是れ、  
このこと、是れ、是れ、是れ、是れ、  
部も収容し得ぬとき、底のつてある、火  
深の、是れ、是れ、是れ、是れ、

○先づの困り、已あま、今花巻を強ひつゝ  
早大出版部倉庫の三階を吉野と協定  
所：先づ外と、夏則ち、吉野と協定  
人を、ぬこの三階へ上げること、  
ある間、吉野の吉野と、一あの中出版部  
倉庫を、吉野と協定し、全部を保つこと  
とす、是れ、一日下見の陣列を、  
地形上大隈倉庫、運搬の便利あり、且  
つ、吉野と協定し、吉野と協定し、  
吉野と協定し、吉野と協定し、  
吉野と協定し、吉野と協定し、  
四十五、十六と、吉野と協定し、  
吉野と協定し、吉野と協定し、



この外に、けいねん者衣の給合を未だおぼせ  
が、花巻の係数、精確の調査を控えんと約  
七千部あるべし、内任を目標、おぼせると約  
三千五万部あり、此任本目録にあると約  
抵ぬ十日以上の便枚あると約八万部三番  
目の便ありと見做し得べし、他の三千五万部  
を一部平均三日と見るときは、約一百万部也  
通計四日萬部と概算すること、不南に女  
らせんども、古物倉の廻り、或は増減を  
おし、余の花巻より往復を出さくべき款を割  
合、このけん、日常おぼせあるへき、古物倉  
の支主におぼせの高き割を拂ふ習俗あり、

先の點り一割をえ、こゝのみを為す、この為め、  
後日客助の使引をせ、えんがき、ぬことあり、また換  
費も備ふるよ、ゆ、支主費用立合、古籍但  
今の親定、こゝもつき、えんを提供する、この立合外  
に、一割、書高の利益、うと、通計三割とえ、  
ハ例親也、四費用、支主の者、古物田約ハ  
年入らざる、ことあるん、は、おぼせ、又、大い、おぼ  
ら、おぼせ、又、方ハ、換を免、か、ん、なる、形勢也、(九月  
十二日記)

余が花巻の大震災後、大部が半福田大  
学出版部の倉庫に預けあり、本年三  
月家宅改築に際し、災後蒐集の



既に前號並に前々號の誌上に詳報されてあつたやうに、今回坪内君を記念する演劇博物館といふものが計畫された事は、久しい友人の一人としても亦發起人の一人でもある私の大いなる悦びとする所である。  
元來坪内君は、周囲の人もよく知つてゐるやうに極めて謙讓な性格の持主であつて、自分に關した企てなどには決して承引してくれない、内諾を與へたことがツイになかつた。たしか還曆に達した際であつたと思ふ、文科の校友諸君の間に何か恩師への記念としての企てを試みようとした事があつた。ところが、其時などもさういふ風聞を耳にするや否や、早速に人を派して固く辭退してしまつたと聞及んでゐる。すべて、さういつた遣り口で押し通して來られたのであるが、此の演劇博物館の問題だけは、不思議に其の企劃をも諒とし、館の建築に關する考案を試みるとか、或は内容等に就ても自分が多年珍藏してゐた材料を悉く提供しようと申出でられるといふやうに、吾々の希望を容れてくれたので、やうやくにして二三ヶ月前に一般に此計劃を發表するの運びとなつたのである。

坪内君と演劇博物館

市島謙吉

トウワウ以て台曰し公庫、預け入る  
又高本宅に存するもの若干あり、今日稽  
査する大小三十九枚あり、右も右の曰し  
公庫に納するも檢出せる番罪を附す  
こゝも同出全部あり  
○愛印に附す可らざる家出若干あり、本の圓  
者教正の傍ら家に存するべき様子を新に採佛  
壇裏の棚に納す、存するものアムハムの内又  
若干枚あり、其他洋本若干、目錄類、自  
若、早稲田大の關係圖書若干、棚取を塞  
か、田宅より納す棚を築き、か今も  
始めに意を致すを感す  
九月十三日記

十二行

これは、つまり演劇博物館の設立といふ事が、同君多年の宿願であつたから、始めて吾々の希望が達せられたわけなのである。無論坪内君が明年古稀の賀に達するのと、沙翁全集の完成とを機會としてはあるが、寧ろ坪内君としては、我國に演劇博物館といふもの、實現する事を本懐とされてゐることであらう——と私は信じてゐる。

私は劇に就て知る所甚だ少いが、聞く所によると、演劇博物館なるものは、我國のみならず此の東洋としては全く前例のないものだといふ。歐米諸國にしても、大學の研究室の一部を特殊の展觀場或は研究室として設備し、演劇博物館と稱してゐるものもあるといふが、獨立した建物全部而も今度のやうに、延坪三百二十坪からの建物を悉く其の爲に提供しようといふほどの規模のものは、殆ど稀だといふことである。

我國には歌舞伎といふ世界に類例のない複雑な劇があり、且それに關する諸種の資料も豊富であるといふに至つては、實は一刻も早く演劇博物館を設けて整理し保存し、研究に便宜多からしめなければならぬのであつた。言はゞ、我國の演劇文化史上、疾くにあるべくして未だ設けられなかつたものが創建されるのである。殊に劇壇の者宿、劇即逍遙」と呼ばれる坪内博士を煩はして完成され充實されんとすれば、恐らくこれ以上の演劇博物館は將來決して現出しないだらうと思ふ。

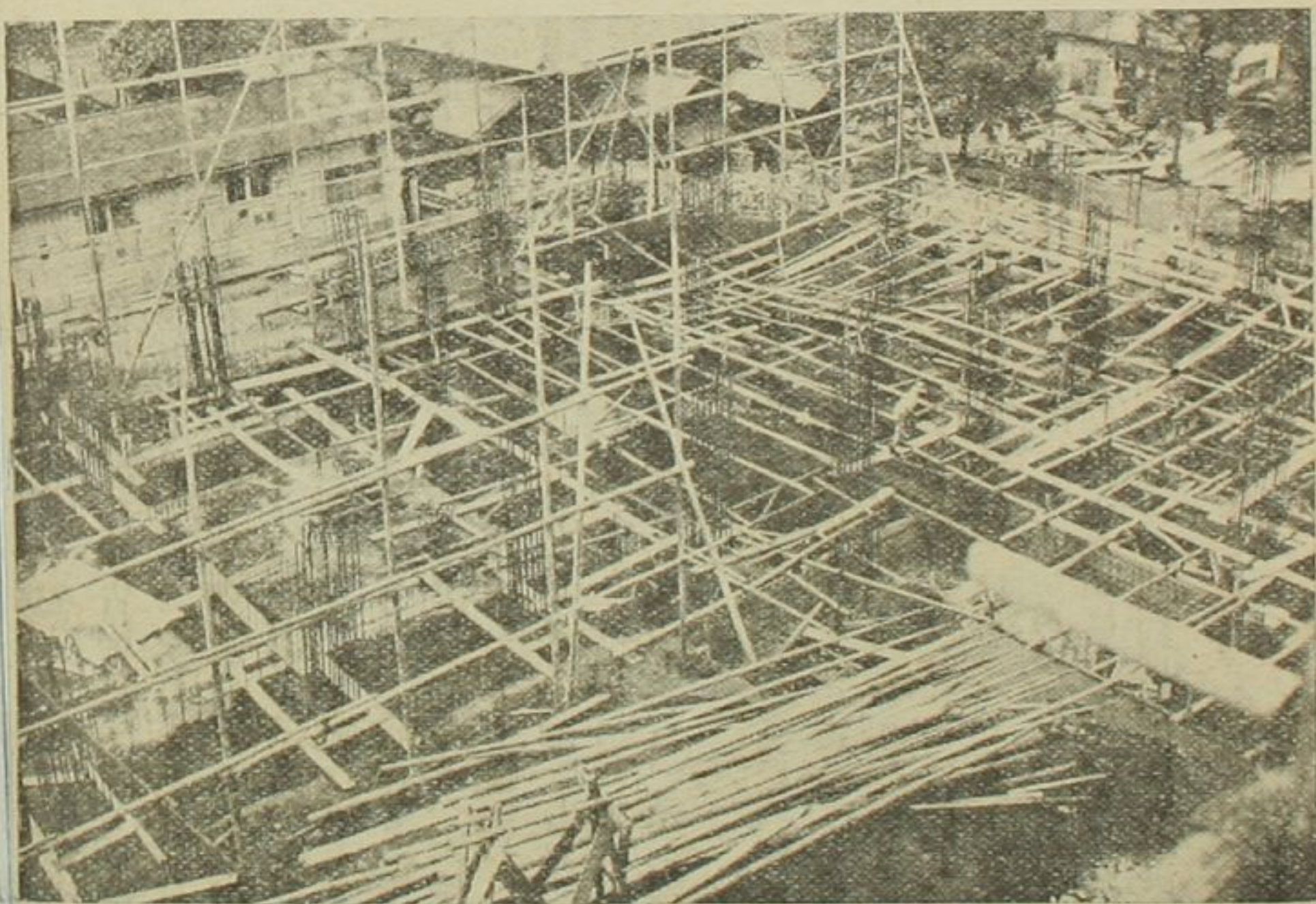
名は坪内君の記念事業であるが、其事業の性質たるや、



記念する坪内君を私人的にどう境遇をよりよくするといふ性質のものではなく、『逍遙選集』の収益を始め多大の私財をも將來此事業の爲に寄與されようといふのであつて見れば、結果に於ては實に公益的な學界の美譽と呼んで差支へない計劃なのである。

以上述べたやうに今回の企ては、諸種の點から見ても極めて有意義な計劃であるので、學校關係者のみならず社會各方面から多大の好感を以て迎へられ、熱心に贊助の意を表された事は、寧ろ意想外といふ程であつた。關西方面に於ても有力な期成會を組織してくるなど、非常の感激を以て迎へられた。従つて其設立資金に對する寄附の申込も續々とあるのであるが、まだ豫定の額に達するには大きな距離がある。將來我國の名物——早稻田學園の美術的名物として耻かしくらぬやう、これが完成を期するには、此際一層廣く學校關係者並に校友諸君の熱心なる御援助を仰ぐの外はない。

最早、建築物の起工も目睫の間に迫つてゐる今日、特に御厚配を煩はしたい。もとゞ事業が事業であるから、一人でも餘計に贊助していただければ、それだけ社會的に有義な公益機關になるわけであるから、御寄附下さる金額の多少を問はず、學園の關係者並に校友諸君に於ては、一人も残らず、即時御賛成の上御申込を了して下さるやう、而して此事業の達成を極力御援助下さるやう、切に希ふ次第である。



事工築増の院學等高二第

左の二文ハ本月號早稲田學園の報に掲載  
のよの余ハ長とまきけり河津あ後の也  
保し給ふことの也  
九月十三日

卯亥辰 裁勿 終 丑月 辰二

高日 亮 美 東 与



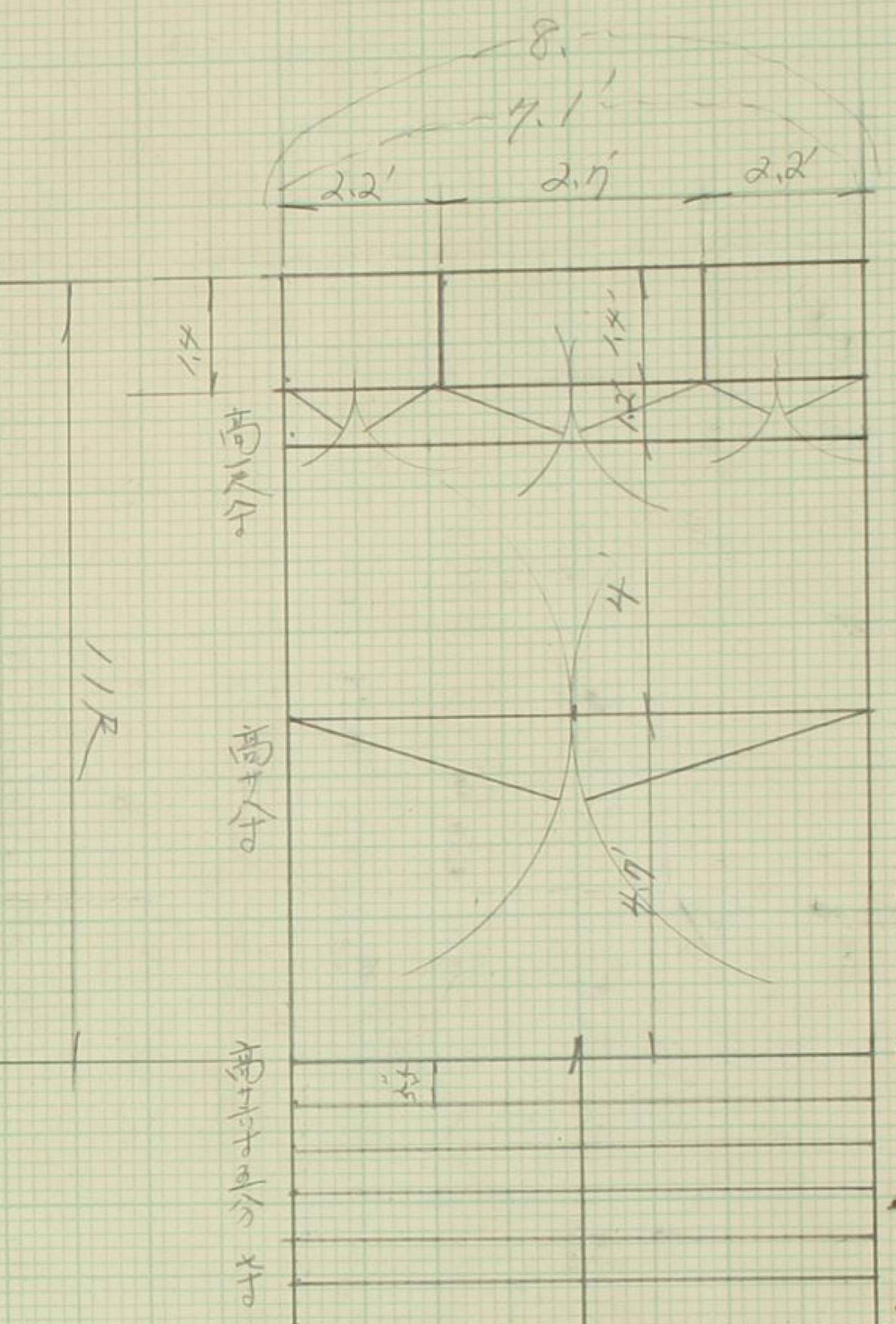
電話九段(33) 貳貳〇番 貳貳〇番 六七番

一、神座 赤雲代	見 積書	赤
二、鏡 五寸厚鏡		赤面
三、下帷 白圓地綾 袴仕立		白條
四、茵 白口二重 綿下		赤帳
五、稱笠 六十角 稱笠		赤色
六、被 白紋綾 袴仕立 一尺角		赤條
七、茵 環り 赤地 大和脚 鏡 白綾 長一尺二寸五分 中九寸五分 赤條		赤條
八、大床子 上等 稱笠 長一尺二寸五分 中一尺一寸 赤		赤
代倉五和八		赤

御受取 裁勿 終身月是二二

高日 竟 竟 竟 与

招魂殿平面図



天井 高四尺五分

幅一尺 四十分一尺

高十寸 奥行十一尺 幅一尺 四十分一尺

十二行



振替口座東京九六〇八番

和蘭銀行 總行 在 東京 丸の内

高田 支店 在 東京 丸の内

一 左 壁代 (赤印 中央)

赤印

長五尺五寸 丈四尺五寸 白紙仕立

代金 八十九

一 左 上 (赤印 左右)

赤印

長五尺 丈四尺五寸 白紙仕立

代金 和五十九

一 赤印代 (赤印)

赤印

長三尺五寸 中一尺四寸 白紙仕立

代金 五十四 和五十九

一 赤印 櫃

赤印

電話九段 (33) 貳貳〇番

長一尺四寸 中一尺五寸 上三寸 梅製白紙仕立

代金 天五十四

一 右 西地 青地 大和錦 京白紙仕立

赤印

代金 五十四

一 赤印 壁代 (赤印 中央) 中三尺七寸 丈四尺

赤印

細刺井 硝子 硝子 硝子 地紅地 大和錦 付房 金物 一式仕

代金 五十四 和五十九

一 左 上 (赤印 左右)

赤印

中三尺二寸 丈四尺 仕立 同標

代金 五十四 和五十九

和蘭銀行 總行 在 東京 丸の内

高田 支店 在 東京 丸の内



振替口座東京九六〇八番

結晶片 糸水 各其戸長二三

二口氏 片身 五丁

一、巾 幌 (巾四尺 巾五尺) 巾三尺七寸 巾四尺 巾 青 條

表地白羽三重 裏地白平織 布節紫 絹付巾

代金 振天子 四尺 巾

一、巾 幌 (祥殿 奥) 巾三尺 巾四尺 巾 青 條

表地白羽三重 柄木 和墨 巾 裏地白平織 布節赤黒 絹付巾

代金 五尺七寸七分 巾

台 巾 五尺 巾 九尺 巾 四尺 巾

右之通 一、是 絹 三寸

昭和二年九月十日

高田 装束 店



市島 手帳

○振視版の内部の装飾を多す。巾の右端  
 柄文、縹色に見え、マシガウ紋味の無い澤  
 ハミ。柳筥や鹿櫃や幌や茵の類ある  
 式、よしく二風とんでみる。故實家ハ一概に法  
 式、かろつとみるかあるいかは、頭を痛ませる  
 二、伊勢貞丈をむか考証一紙、清く古法古式  
 二のふ泥ある者やうと思は、美く故實といふ  
 二の之を何んかあるかあるか、ちと日本固有の  
 原始的の舊型を範とするのむあるか、追り  
 二、爪とんぼのをもふとす、のむあるか、私を  
 二、有職柄文、柄の暗いものあるか、決して系  
 始の型をその條に、観念してあつたか、あるか、



く時より泡び或の相違も極く或の有酸のみの家の  
手は工夫を以て其の( )後より乾と云ふも其の延  
ふ( )ことを故實と其の( )の( )と云ふ( )と云ふ( )  
と思ふ、有酸も此の( )を生じ、其の( )と云ふ  
同じものを心する( )の相違が起る、や( )其の  
流( )亦故實の( )を( )て( )る( )に( )思ふ、( )角考  
証の研究が其の( )の( )に( )成( )ん( )ど( )ある、( )ま( )か( )し( )ま( )人  
ハ( )全( )く( )川( )外( )人( )が( )容( )喙( )の( )出( )来( )ぬ( )る( )が( )面( )倒( )臭( )い  
ま( )の( )と( )ま( )つ( )て( )お( )る、( )ま( )か( )し( )る( )ん( )ど( )ま( )人( )が( )も( )趣( )味( )あ  
る( )ま( )の( )趣( )味( )の( )感( )じ( )ら( )る、( )有( )酸( )の( )い( )ろ( )く( )の( )ま( )の  
つ( )ま( )う( )の( )趣( )味( )的( )ニ( )工( )夫( )を( )ん( )、( )酸( )味( )も( )ま( )の( )か( )可  
と( )ま( )る( )ま( )あ( )ひ( )ま( )の( )。 ( )極( )く( )有( )酸( )を( )ま( )る( )ま( )と

無酸味のものとやうな( )と云ふ( )け( )ん( )を( )、( )実( )に( )酸( )の( )洗  
練( )を( )た( )酸( )味( )の( )ま( )の( )か( )ま( )い( )な( )ま( )あ( )る、( )家( )庭( )用( )の( )も( )衣  
冠( )用( )の( )も( )七( )百( )端( )の( )油( )度( )を( )し( )て( )ま( )其( )の( )材( )料( )其( )色( )料  
も( )構( )造( )何( )れ( )も( )趣( )味( )的( )ニ( )ま( )来( )て( )お( )る、( )ま( )の( )か( )ま( )い( )。 ( )衣  
裳( )冠( )帽( )も( )ま( )の( )階( )級( )官( )職( )の( )高( )下( )を( )お( )も( )つ( )て( )ま( )の( )  
お( )も( )つ( )か( )あ( )る( )け( )ん( )も( )ま( )の( )か( )ま( )い( )と( )油( )和( )ま( )す( )や( )ら( )る、  
工( )夫( )を( )ん( )ま( )の( )衣( )裳( )の( )染( )織( )を( )い( )、( )上( )品( )が( )高( )貴( )な  
粘( )巧( )で( )風( )儀( )も( )異( )な( )る、( )今( )日( )か( )ら( )見( )る( )も( )趣( )味( )家  
を( )満( )足( )と( )ま( )る( )ま( )の( )ば( )か( )ら( )あ( )る、( )柳( )呂( )呂( )る( )ま( )の( )原  
始( )的( )の( )型( )も( )あ( )る( )か( )、( )何( )れ( )も( )一( )種( )の( )酸( )味( )を( )感( )じ( )ら( )る、  
唐( )櫃( )の( )構( )造( )も( )今( )日( )の( )か( )か( )こ( )や( )ト( )ラ( )ン( )ク( )を( )較( )べて( )何  
れ( )も( )其( )の( )構( )造( )の( )高( )雅( )も( )異( )論( )に( )あ( )る( )ま( )い( )、( )ま( )の( )



塗料も所々<sup>木</sup>地の製名は清浄さとして神々しいものあり、その宮居に用いる戸帳は純白の丸に凡雅の模様があら、紫色の帯の紐が外へ垂りて凡雅の模様のあらさがある。月曜の模様の形を深めるが有職の式であるが、此の紋が原始的であるけんともおのづから高麗の紋味がある。紺や墨とまじり縁取り取らるる各地の大和錦を以てするものも、三つ並の模様のものもよく得る。今日有職の衣裳を手直しするに、この難いが、京都の公苑の葵祭の行列をせんば、其の大体からいって、今も有職の衣裳をつくる人の物の列にあらぬ、今の風俗とい異なるん、その行状は

華舞の内より調和を保つてある。そのト手近か有職の片影をえらぶべきは、歌舞壇の内装の様式より、その模様の人物の衣装、代物、糸、調和の如き、やむを得ずに出るべきもの、羅かさりの沓、おのづから故実を基いてあるから、高麗の紋を感ずるものも、有職の美は古くからあるが、考証としてあるが、趣味的に研究せんとあつても、思ふ所のこころあるものも、或る誤つてあるが、考証家の研究のゆゑ、<sup>意味不明</sup>なるものも、知るべし、免角、趣味ある工風、そのものが故実であるが、その味を至る院に標準するものも、思ふべし、そのかゝる人、あつて世の中が推移して、古今の本質をえらひ











と題するもの二冊程出来り。此洲、坪内方退の  
紀念として演劇博物館の建設を目論見、余委員  
と推せん。二十土着の資金を集め、  
千し、その委託を願ひ、以て其末に全力を注ぐ。  
あゝ、出版部より新案を目論見、漸やく成り、印刷  
分此より市田二地を併せて社団法人に任せ、此等の  
数端にあり、りたるも大方にあり、  
授を願ひ、  
以上の注射は不収支を継続し、健康を保ち  
得ざるは其為め、  
はる一萬六千圓の負債を生じ、  
此を蓋印せんとす。配中、  
十二行

一、二の件とする。

九月十四日誌

の塚原内生(愛知)と申す。通信を無事と切あり、部  
政を布く、初め前島男を助けたる方好力す。余  
前島男の情を憐れ、  
送るをよこし、  
セナ、  
今日、  
九月十五日



丁卯元旦 二首

夢舟周草

上帝駢龍昇九天，群黎跽哭鼎湖前。青皇旋駕鴻鈞轉，春入乾坤諒閣中。

其二

送旧過除夕，迎新尚諒陰。八音嚴過蜜，九陌寂森沈。門外無輪輟，檐端有凍禽。寒雲殊未散，愁絕抱寸心。

湘南吟 一

城中臘雪祭堆何，日夜圍爐養日痾。借得湘南故人墅，做吾安樂避寒窩。

其二

春潮盈浦淑，坡岸草如煙。林外山容靜，谿中竹色妍。晚晴宜望嶽，夜雨足催眠。噉々聞歸雁，驚神北闕天。

其三

翠松連海嶠，野水濺前汀。雨過蘋香活，潮來魚氣腥。螺塙懸網罟，漁櫓繫漁舲。我有滄浪譜，不須嗟老齡。

其四

陽光融地脉，啓蟄動初聲。欺雪梅唇白，穿煙柳眼明。沙鷗催午睡，漁父卜晨晴。愛此幽栖趣，渾忘逆旅情。

其五

雨歇村橋迳，風柔籬落邊。柔晴扶竹杖，逐興聳吟肩。杏李雲千樹，柳楊煙一川。經過多賞意，立盡夕陽前。

其六

春禽鳴去伴相呼，屋後屋前梅幾株。索笑巡簷繞十步，如

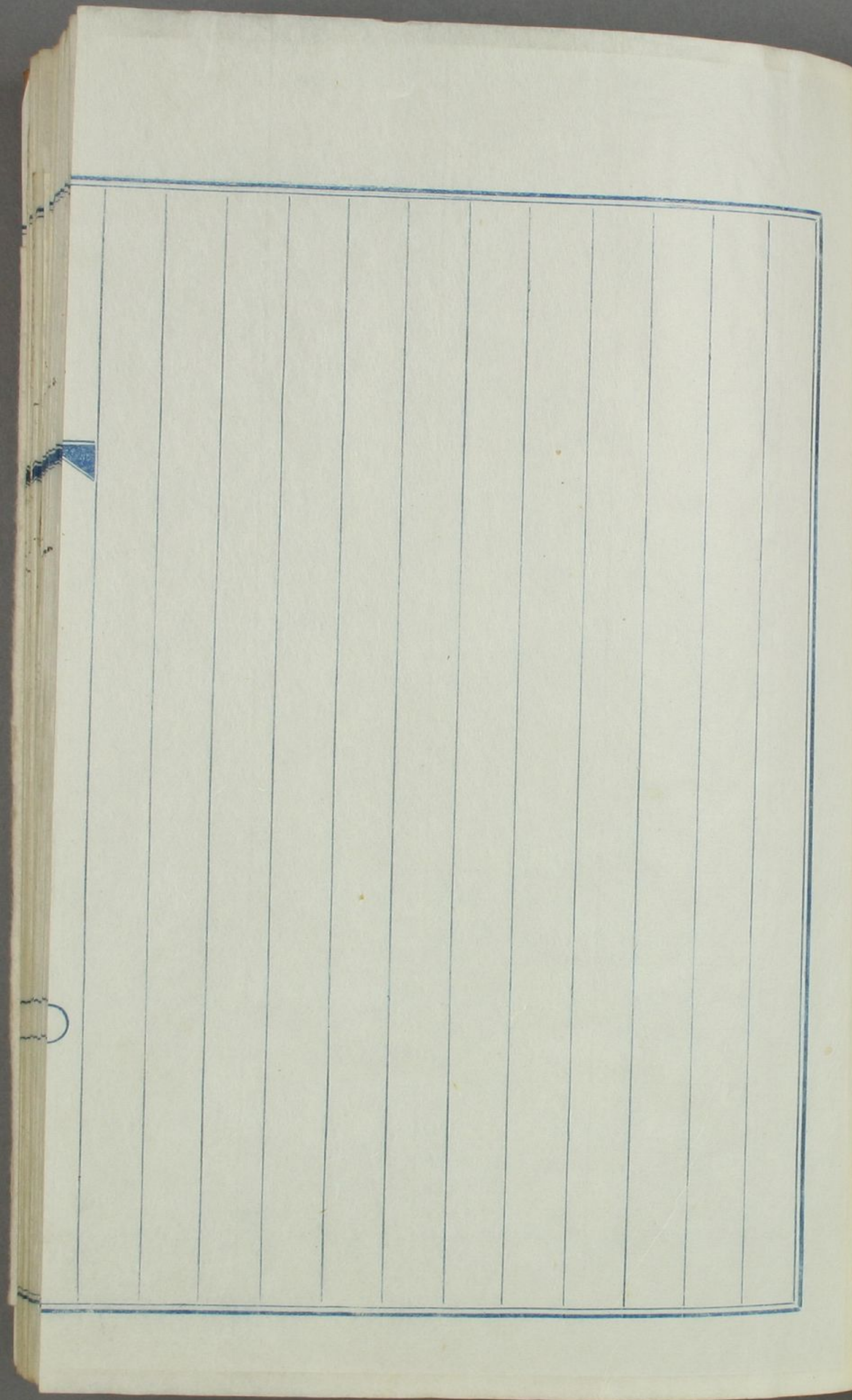




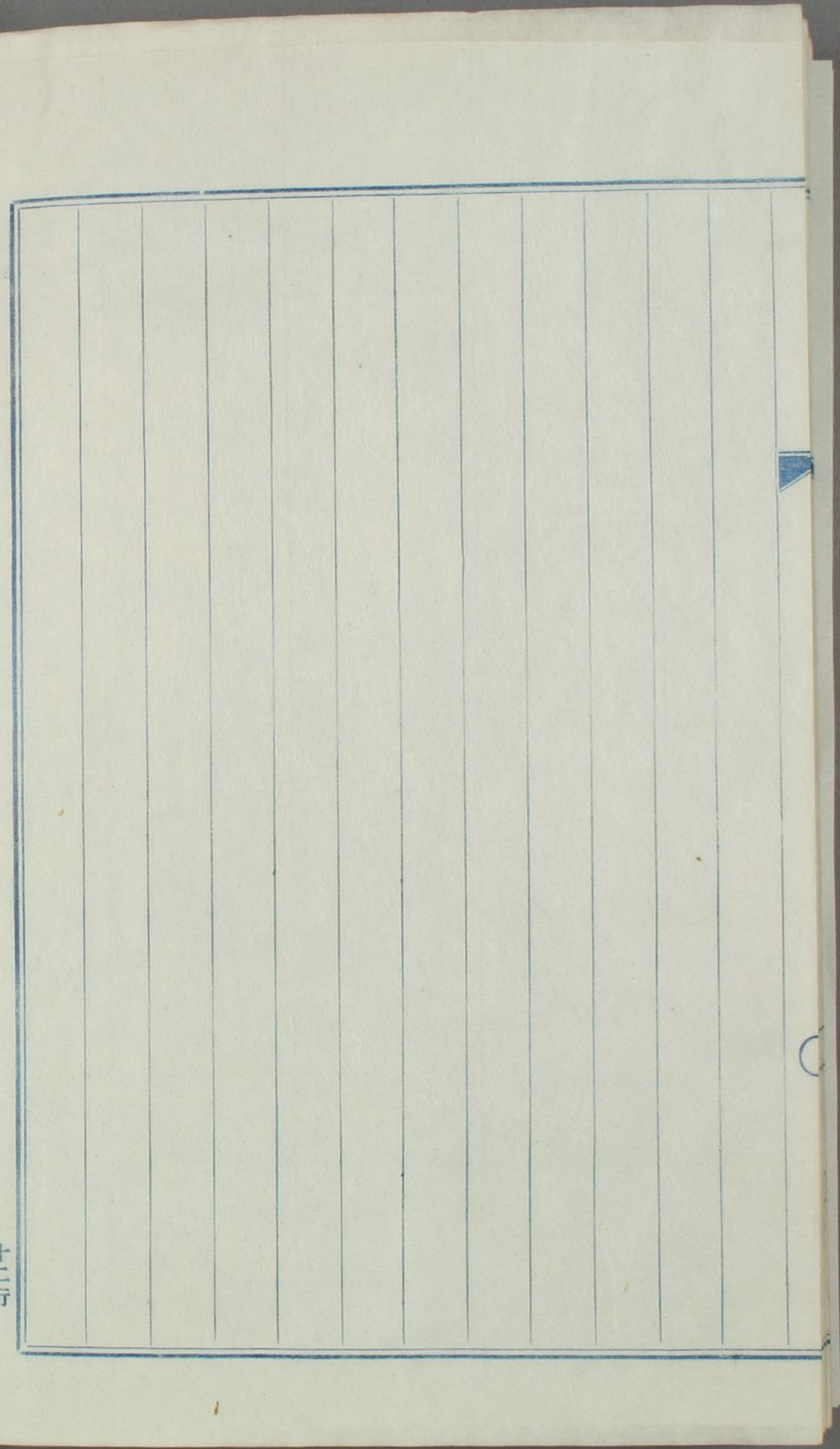








十二行





◎ 大正十五年以降拂込金

金貳拾七萬五千圓也

内譯

第三回拂込 大正十五年五月卅日 拾萬圓

第四回拂込 同 年十一月卅日 七萬五千圓

第五回拂込 昭和二年五月卅日 拾萬圓

以上

◎ 自大正十四年十二月  
至昭和二年八月 主要支拂金

金四拾貳萬參千七百八拾貳圓九拾九錢也

内譯

別途積立金

五〇〇〇〇〇〇

社員職工退職手當積立金

三八五四七六九〇

借入金返済額

一〇〇〇〇〇〇〇〇

諸機械購入

一一六三五七八七〇

土地購入

三三、七二〇三七〇

家屋及造作

五八〇四三八〇



雜具什器	一二、九五〇五一〇
市田オフセット買收費	六七、一三九〇〇〇
移轉費	一五、七八四七〇〇
爭議費	二八、四七八四七〇
以上	

◎ 昭和二年九月以降諸支拂金豫算

金拾壹萬貳千貳百九拾八圓也

内 譯	一七、八六一〇〇〇
市田買收費殘額	

小久江氏慰勞金	二五、〇〇〇〇〇〇
四六全判平臺印刷機 貳臺	一一、〇五〇〇〇〇
自動紙差四六オフセット機 壹臺	二四、〇〇〇〇〇〇
四六判校正刷機械 壹臺	五、〇〇〇〇〇〇
出版部舊事務所移轉費	七、〇〇〇〇〇〇
分工場増築及物置移轉費	八、六二〇〇〇〇
北側石垣及防火壁工事費	一、三〇〇〇〇〇
新館各階ブリツチ工事費	九七〇〇〇〇
丸版、鑄造、ルラー、寫眞、移轉費	三、五〇〇〇〇〇



右舊工場運動場ニ移轉費	三、〇〇〇、〇〇〇
新館及舊事務所開ブリツチ工事費	六〇〇、〇〇〇
帳合機修繕及備品	六六二、〇〇〇
雜口	三、七三五、〇〇〇
以上	

外二十月十五日勸銀返還額壹萬參千圓アリ

收入總額 (自大正十四年十二月  
至昭和二年八月)

拂込金額 (三回分)	二七五、〇〇〇圓
社内保留金額 (四期分)	一一〇、〇四〇、五〇〇
大口支拂一ヶ月延期額	二三、二八三、〇九〇
合計	四〇八、三二三、五九〇

支拂總額 (自大正十四年十二月  
至昭和二年八月)

純現金支出額 (負債勘定償還)	二一三、一五九、四〇〇
投資額 (機械其他家屋)	二五、七五六、八三〇
合計	四六四、九一六、二三〇



未支出總額（昭和二年九月以降支拂ヲ要スルモノ）

投資額

一一三、二九八〇〇〇

支出總合計

五七七、二一四、二三〇

◎ 大正十五年以降拂込金

金貳拾七萬五千圓也

内譯

第三回拂込 大正十五年五月卅日 拾萬圓

第四回拂込 同 年十一月卅日 七萬五千圓

第五回拂込 昭和二年五月卅日 拾萬圓

以上

◎ 自大正十四年十二月  
至昭和二年八月 主要支拂金

金四拾六萬四千九百拾六圓貳拾貳錢六厘也

内譯

諸機械購入

一一六、三五七八七〇

土地購入

三三、七二〇三七〇



家屋及造作	五、八〇四、三八〇
雜具什器	一、二、九五〇、五一〇
市田オフセット買收費	六、七、一三九、〇〇〇
移轉費	一、五、七八四、七〇〇
小計	金貳拾五萬壹千七百五拾六圓八拾參錢也（投資額、機械家屋造作土地代）
別途積立金	五、〇〇〇、〇〇〇
社員職工退職手當積立金	三、八、五四七、六九〇
職工貯蓄金返却（爭議ノ爲メ）	一、一、三三二、三七六
年賦償却金	二、九、八〇〇、八六〇
借入金返濟額	一、〇、〇〇〇、〇〇〇
爭議費	二、八、四七八、四七〇

小計 金貳拾壹萬參千壹百五拾九圓參拾九錢六厘也（純現金支出額負債勘定償還）



入社社員及雇員		退社社員及雇員	
人員	一人平均月給	人員	一人平均月給
二五	八三、五八	三七	一〇六、四八
三一	四三、五四	一八	四一、九九
合計	五六	合計	五五
	六一、四一		八五、四〇
	三、四三九、〇〇		四、六九五、六〇
	一、三四九、六〇		
	三、〇八九、四〇		
	合計金額		





小文江年一鳴

日年刻

村山毫貳

文云

山魂水精主

日年刀





石塚三郎 日年刀

○余は前者の書名を法のものなりとあり目録印刷  
の如く先づ回者の調査を要し、札元とある  
へき吉原の主人村口権尾山を方存吉田五人を  
回者不在の出版部人哀産二階を合場所と  
て一時のりり時をこわけ全力を挙げ、回者の  
見合けをとり、回者の組合せをへり  
りえとカレトはあり、初りうき六る三十段節  
こより次日ある三る故節 外こ寸珠を全部  
る函を油書し、目録の原稿ここ、二成り、一節  
三四冊組合せなるものあり、此冊数約三  
千こ上へく外こ寸珠を二千冊あり、高書あり  
二俣の若干あり、目録に入らざるもの数千







試海翁印譜

三鈔本同字豆本

五峯十稿

五峯詩卷

五峯造行

五峯造行

蘇村小稿

道遙行

鴻爪遺墨

雪槎墨戲

新鴻舊記

北溪詩選

蘭溪稿本

一

一

一

二

二

二

五

一

一

一

一

三

廣海書帖

鐵為其他函帖

三修家印冊

漢銅印書

稀書複製本

元明書印譜

正德本大字

拓本

一行徑切

鑑譜

移為墨如

暢畫帖

一

一

二

二

全

全

一

一

一

一

一

二

冊

冊

冊

帖

帖

帖

帖



法華 任 八卷  
長頸丸讀法 一

古回百首 一  
大德寺寫佛古き交帳 一

豆 本 廣徳  
形小四八一

豆本沙翁全集  
豆本各回字書

此外種々の為要ありしを却て元令にせしむる所也  
數十冊ありしもの一冊にす  
幾しや回書の場合に尤も之も尚おあり  
十二行

古家の観あり

油の査を彼修りたる處者老まんと祇楽改の集  
料理より扱き席上余回者集者(就キ)  
迹徳の法と為す、室ハ彼等より廿余の書  
昔に就この感とを抄かんといひ一紙号に藉  
口してそのあを借したる也、彼等曰く、三千粒  
以上の目録も書成表する者、或人と未だあり  
也と、又云く、書價とせり揚くること、回者も又自ら  
いふ所の條件あり、流石に先生の蒐集に於ては  
つて、どの本も特徴がある、その特徴を居か  
癖といふてある、長上の場合も必らず此のソセ  
が價と評議せし、あるてある、寸珍を百あり



賣主物意の一異彩のこゝれを一抗して受くるもの  
の方向をいふべきなり此の賣主の眼に成りたる  
ものと見し可きなり皆く楽観論也 九月十九日  
記

聚教の天則也集めたる遊に教するの目を  
き能らば吾人亦何をか言えや既に吾人  
情愛惜の情興を能はず余公物を集め  
て而して後教し給例改修に二回あり十年  
心血を流きたる名家書の開教の巻を友  
人の手に移し給こときし近年愛玩せし者  
畫教の幅骨董教の跋を帝都の大  
市場に余公物を標榜して受印し給ことき

其の著しきもの也其の都府愛惜の感子  
動かして入たるの事實也今乃ち更なる亦三  
回の賣主と為さんとも亦改修と曰し情  
あるもを得ず然れども死後こそ受らんとも  
生前賣る可とす吾人の生前其感念  
を得ざるを幸とせずんばあらず而して  
其の賣るは傷歎を補填するが故にあらず  
其の財を他の財産に賣らんともするも  
きす吾人の物をか病さんや震はし四推り給  
この多くの物を鳥有に歸し給吾人幸に  
罹災を免かんと幸に存するものも賣つ  
て生活の要の物に易くんとす富平の仕



合と謂ふ可也。但此少妙。此ことを為すに  
皆死後を悔一人とする。よる。志あること  
利んハ帳外なるをさるるを得ざる也。

○此道高田より峰へ、後乃て下谷村宮家の塩  
系漫らんとし、族を争ひ、飲飲にこいさつりし、  
あるは味家、位に改家を改進せり。元  
室灌酒、酒名皆自也。床に土床定本の  
書しを掲ぐ、國ハ花魁也。多ん左の語を  
す。

九月廿一日記

海ら雲の皮、雲の海の骨とこと  
ハ海を雲と云ふ、米えハ雲を海と

此、雲と海のやの可、迷も去原さと  
も去原

柳城、雲も海も去る、海の波  
のて、砂のさのぬこ

碎、録、山

○大隈侯の記念講堂の、この早稲田の俸親  
らるる、さるる、さるる、都の俸親也。此の建、飛  
費を、寄附する、この五萬、五千人を、都、五  
萬田、の筆、頭、さるる、十銭の、徴、こ、及ぶ、故、侯  
の、聲、聞、く、見、る、さるる、侯の、表、さるる、や、國、民、衆、を  
日、比、谷、こ、さるる、分、衆、者、三、十、萬、人、こ、及、ぶ、此



海を舟寄附七亦四民の乗る所と云ふ可也  
 侯恐く地下に激突を洩さん 九月廿一日記  
 ○本館午後出版部倉庫を今家へ移すに  
 回者を分類して、さうく箱に納め大略整  
 理済み、大小本架の数二十五個、小書持三個  
 仕入料二振本架一個とある、回書も納め  
 る、若くは倉八個揃あつたを、四個あり、八  
 本架にありしものを今のを三十七個とある、数百  
 冊の箱もの減して此数とある、内容ハ抵所家  
 書に属すといふ 今 九月二十一日録

○横言仲氏易

家言者復古編

六書名

方志考

趙凡夫印譜

春の城格葉

代官書文集

右一函に収む

○元治各印譜

五冊

右一函

○複製寫本

大中小

三函に収む

○春城日誌

小三函



○自修印譜

二函に収む

○家為遺書

二函に収む

○字本類

一函に収む

○春城雜抄

教函に収む

○豆本類

一函に収む

○祖母控名

一函に収む

○雜書

二函に収む

○法書經切帳等

一函に収む

外:

研二面 瓢一輪 一 竹海邊

各一極 宙邊 器一 如 意二

等 一 納 ヲ ヌル 小長持 一個

家廟に關する書幅 寺尺

拓下等 一 納 ヲ ヌル 小長持

一個

書画類 書簡見込等



ヲ納メタル仕入箱一個

振本を納めたる大振一個

空キ箱數多ヲ納メタル

仕入の箱七個

右の本宅新築落成の日移目スベキ

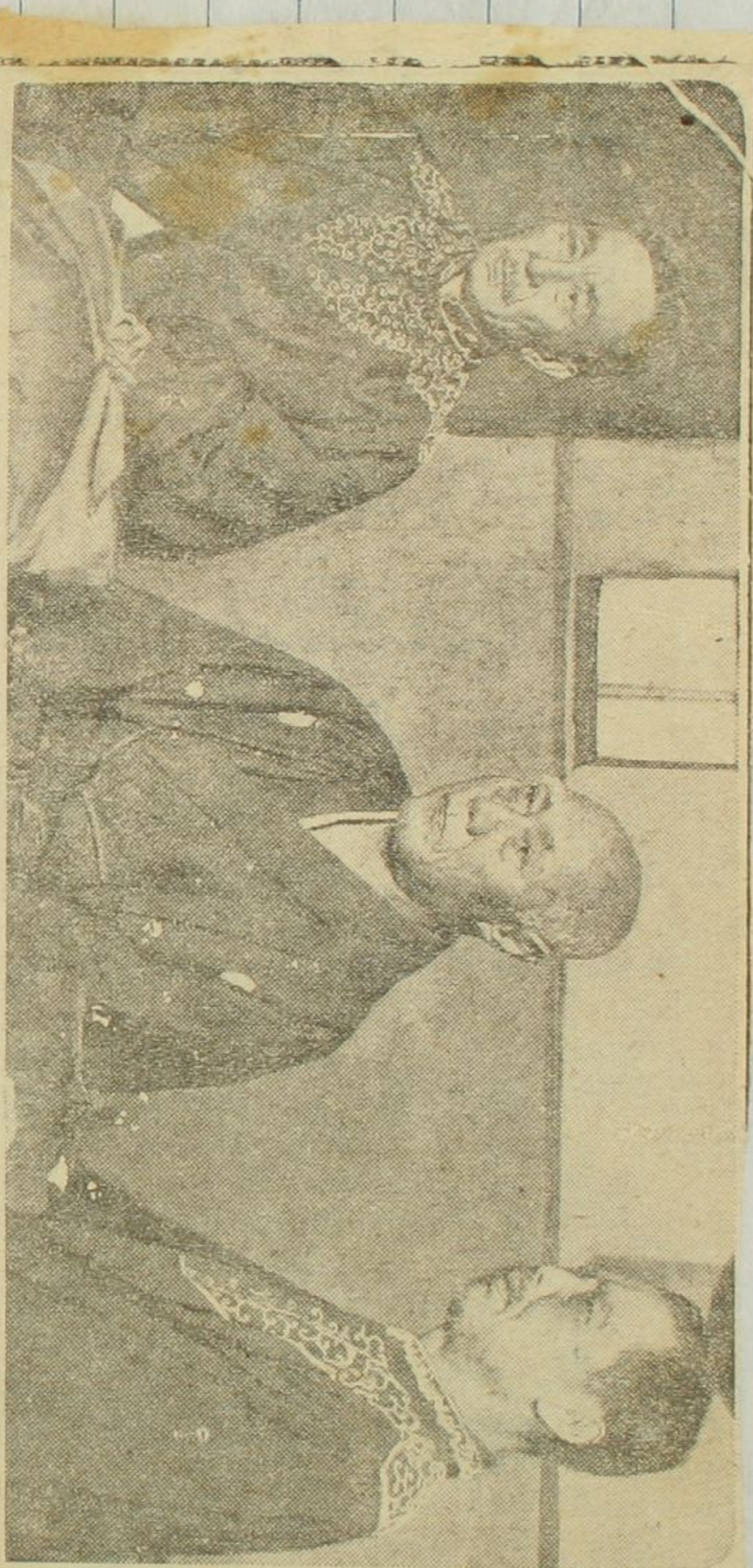
事

○高橋義彦来りて、家老の権儀文書一巻  
を示す也。紙依は料ニ納めんとして借りしこと  
をもとめ、即ち流す。此文書、天正十二年星  
川左馬頭宛見し文中、粟生津の地名あり  
紙後、文書たることあるを以て、朱印は印

地是利摩利支天云々云々也。義彦の  
法にこの乙寶寺の舍利を乞ふも、左眼の  
舍利といひある也。伊豆西家の星川文  
を流すや、偶に此舍利星川氏の城守りな  
り乙寶寺の佛徳法にて二十貫文を以つ  
て換へたること中條房持の文書に載す也  
又、右末津の傳小と云ふ  
○新寺落成切振一二を存す、皆四角板手  
のよみ、由九月廿三日星川に載せたる山  
下重民の幕末流す

九月廿四日





(右より) 花井博士、箕浦翁、元田賢氏  
 (昨日大阪地方裁判所に於ける松嶋事件公判にて)



瓦解後に於ける  
 舊幕府人士の情況

山下重民

二百六十餘年に涉れる幕府榮華の夢はこゝに破れて、南柯蟻群の驟雨に會へるが如く遽に動搖し、伏見鳥羽の後進に落花飛蝶と散亂し、辛じて江戸に引揚げし後徳川家諸士の情況や如何、請ふ之を左に述なむ。

○舊幕府人士の思想  
 今より五十年前に在りては、萬世一系の天皇陛下に對し奉る大忠如何といふ事は、一部人士の外は遺憾ながら其の念頭になかりしが如し。只歴代恩顧の我主家に對し、忠誠を盡せば、臣下の能事は則ち畢れりとするが實際の情況なりし。但陛下をば當時は禁裏様

と稱し、神とし尊敬し奉ることは、さすが帝國の臣民なれば、深く之を諒解し居るも、數百年來の習慣として政權は公方様即ち將軍家の掌握すべきものに、禁裏様の御親政は却て「モツタイナキ」事なりと信じ居たり。

當時旗下御家人にして、國學を修めたる者、又水戸學を爲せし者等は、寥寥晨星の如く、大抵武士は武道一遍にて足れりとし、大義名分に至りては、絶えて問ふ者なく、人物を見分くるの明も乏しかりしに似たり。されば紀州公方様家茂をば特に慕ひ、賢明なる舊一橋公慶喜をば左程歓迎せず、中には陰に豚一など嘲る者さへあり、幕府も最早末運に傾ける者と察せられたり。乃ち公が慶應三年丁卯十月十四日大英斷を以て政權を返上し、同廿四日將軍職を辭したるは、洵に殘念なる事にて、其罪は薩長土の姦策に在りと爲したり。大政奉還の奏聞書中に云、宇内ノ形勢ヲ察シ大政ヲ奉還ス。其意以爲ク、政權ヲ一途ニ歸シ以テ天下ノ公議ヲ盡シ、萬國并立ノ皇基ヲ

建テ以テ國威ヲ海外ニ輝サンコト、今日ノ急務ナリト。是レ祖宗二百年來繼承ノ大權ヲ私セス、斷然奉還ノ學アル所以ナリ云々、何ぞ其の言の堂々たるや、此卓識あり、故に恭順の誠を盡されたるなり。

○壯士の脱走

當時大局に通し外國の干渉等を受ひしハ勝義邦安芳・山岡鐵太郎等數人に過ぎず、其餘は官軍の東下を聞て、或ハ箱根碓氷の險を扼し、或は尾濃の野に進軍し、一大快戦を試みむと主張したれども、皆容るゝ所とならず、されば血氣にはやる少壯子弟は、前將軍の爲す所を「モドカンタ」思ひ、一死以て徳川家に報ずるは此時なりと爲し、奮然家を棄て東北地方に脱走せり。陸軍の花形なりし大鳥圭介は大刀を撫して吟じて云く、

八萬親兵盡女兒。偷生捨義志多違。忠肝別有三千勇。却恨君王早見機。

又海軍の花形たりし榎本鎌次郎も絃頭に立て詠じて云く、



勤閩名門悉倒戈。祖宗百戰奈山河。誰圖開化文明日。願見亂臣賊子多。

是れ脱走者の意氣をば明かに表白したるものといふべし。

前將軍明治元年戊辰二月十一日早くも身を屏け、忍ヶ岡大慈院に謹慎して、

國のため君のためとてしばし身をと詠じ、四月十一日江戸城明け渡の日、

更に水戸に屏居して益々恭順の實を示されたり。抑々官軍が江戸城總攻撃の豫定は三月十五日なりしが、勝義邦の盡力にて其の事なく、江戸市街も隨て焦土と爲るを免れしは、市民の大幸なりし。要するに前將軍の謹慎恭順此くの如くなりしに因り、國內の戰塵は久しからずして鎮りたり。若し前將軍にして號令一下し、飽まで敵抗の意志を發表せられたらむには、其の前途は實に測るべからざりしなり。然るに若松城五稜郭等の決戦を見たるのみにて、二年己巳五月に至り東北悉く平定に歸したるは、國家の爲めに慶賀すべし、

畢竟するに、榎本大鳥等は徳川家の覇業を失ふに當り、一人の鯁骨漢なしといはれては、祖宗に對し面目なしと思ひて、聊か最後の花を咲せたるなり。竹添進一郎戊辰役中の作に云く、

以弟討兄臣討君。六十餘州無大倫。徒將一敗論一曲直。孰是逆賊孰王臣。城上狐鳴月色濕。燈前一夜萬感集。神州陸沈果如何。腥雨腥風天亦泣。

今より之を見れば、同胞兄弟の争に過ぎざれば、速かに鎮靜したるは、明治天皇御威徳の然らしむる所と欽仰の外なし。

榎本鎌次郎が蝦夷地を乞ひ徳川舊家臣を撫育せんとを請ふ書の冒頭に、「徳川脱籍ノ微臣恐懼ヲ顧ミズ、懊惱悲歎ノ餘リ、昧死奏聞仕候」とあり。朝廷に對する敬禮は未だ嘗て失はざりしなり。又云、徳川家ハ二百餘年養來リ候者共三十有餘萬、賜封ノ七十萬石ヲ以テ相養ヒガタク去テ聊カ士道相守候者、今更商賈ト伍ヲ爲ス能ハス、

て若し能く支へ夜に入りなば、此の如き諸部隊四方より紛起し、容易に鎮定せざりしや明なり、上野の早く潰敗せるは、三河島の一方を開放して包圍せざりしに因れり、官軍の參謀大村益次郎の方畧宜しきを得たりといふべし。

上野の戦争は、一堆の墳墓に、幾多彈丸の痕跡を黒門に留め、江戸にも生きたる武士あるを後世に示せしまでに、容易に事済みしは大幸とやいはむ、それにも有名なる吉祥閣瑠璃殿を一炬に付したるは惜しき事なりし。

同日二十日徳川家の論達に云、

去十五日上野山内彰義隊其外屯集の者へ、官兵御差向ニ相成候、全ク前上様御趣意ニ相背往々粗暴之所行ニ及ヒ候者モ有之候ニ付、御追討有之候ニ而、御家ニ御疑念有之候筋ニハ無之趣ニ候間、其邊篤ト相心得從來謹慎之意極別相分、私ニ屯集致し騒立候様之義決而致間敷候、若違背之者ハ急度被ニ仰付候次第モ可有之候。

右の文中に「往々粗暴ノ所行ニ及ヒ」

とあり、彰義隊中には、講武所備に燕尾衫を著し、白堅縞小倉のマチ高袴を穿ち、鑓太の朱鞘の長刀を門さしに差をらし、厚齒の朴下駄をはきて、大地を踏とるかし、肩を聳かし腕を振り、街頭を横行しつゝ、鑓片を附けし官軍に遇へば、故らに喧嘩を賣りて屢之を斬りたり、粗暴といはむより寧ろ亂暴と稱すべき所行なりき。

○幕府諸士の方向

鳥羽伏見の衝突以來前將軍は恭順謹愼し居らるゝも、其の部下の一部ハ頻に抗戦したりしかば、あはや徳川家の運命はいかに成り行くらむと危ぶまれしに、閏四月廿九日に至り

慶喜伏罪之上ハ徳川家名相續之儀、祖宗以來ノ功勞ヲ被シ思召、格別之歡慮ヲ以テ田安龜之助へ被ニ仰出候事

とありがたき勅諭あり。五月三日には徳川龜之助重臣を呼出され、旗下歸順之輩自今朝臣ニ被ニ仰付ニよしを達せらる、而して町奉行組與力同心の輩は鎮將府附に召出され、祿高扶持米等は

假令窮戦死ニ抵リ候共、三河已來ノ士風ヲ汚ス可ラズト決心、險難ヲ經、萬死ヲ冒シ東西ニ遁逃シ云々」以て當時の事情を察すべし。

○上野の戦争

江戸城明け渡しの後、銃砲の轟きしは、緑雨濛々たる皐月の空、上野黒門口に起りし彰義隊の戦争なりとす、其の顛末は人の知る所なれば贅せず。江戸に於ける官軍との大衝突は唯此一事のみ。此戦争は終日ならずして勝敗已に決したれば、影響する所大ならざりしが、若し延て夜に入りなば、ゆゑしき大事に至りしならむ。そは何故なりやといふに、當時幾隊の人士は彰義隊を應援せむが爲に、竊かに負郭の各寺院に屯集し、其形勢如何を窺ひ居たり、我父は表銃隊取締役なりしが、是日廣尾の祥雲寺に諸士と共屯集せり、適々官軍三名の來偵するあり、はやりをの一人躍り出で、其一名を斬殺したれば、他は直ちに遁れ去りしよし、かくて上野潰敗の報に接し、互に機會の來らざりしを嘆じ、各自退散せり。彰義隊にし

是迄の通り下し置るゝとの命あり。同月廿四日徳川龜之助に領知高七十萬石を下賜せられ、駿河國府中の城主に仰付られたり、其の領地は駿河國一圓其の餘は遠江參河の兩國内なりき。

是に於て東京に在りし舊幕人士は各自至急に其方向を定めざる可らざるをとなれり。六月六日徳川家の觸書に云、御領地高相立候ニ付而ハ、多人數之御家來御扶持行届難ニ相成候間、不便至極ニハ思召候得共、無御據ニ御切米御扶持方御役金等都而諸御手當向迄、當六月分より御渡方相成兼候、就而ハ進退之義勘辨致シ、朝臣相願候共、御暇相願候共、決著之處頭支配より速に承糺申聞候様可被ニ致候。

但知行取之向も同様可被心得候かゝれば其の方向に三あり、一無祿移任の覺悟にて舊主家に從はむか、一歸順して朝臣とならむか、一御暇を乞うて農商に歸せむか、此三途に就き是非とも其の一を擇さ



るべからず、嗚呼いかに決著すべきか、  
家族相談より親族會議に及ぶも、いづ  
れも兎角の議論あり、結局へ各自の意  
志を以て解決したり。

第一の無祿移住へ、今より見れば  
最も困難に見ゆるも、當時は賛成  
者甚だ多かりし、其の説は祖先以  
來歴代莫大の御恩を蒙りし吾々は  
假令砂を噛みても御跡を慕ひ奉ら  
ざるべからずといふに在り、武士  
の家に生れてはさもあるべき事と  
人皆いへり。

第二は今より見れば開けたる説に  
て、主君既に恭順せられたる上は、  
臣下たる吾々は遠方に移住して、  
益々御厄介を掛るが如きことあり  
ては相濟まず、普天の下王土にあ  
らざるはなし、故に朝臣となるも  
何の憚る所あらむや、といふに在  
り。此説へ第一の主張者より蛇蝎  
視せられたり、云く、彼等變心者  
は今に見よ、會桑二藩士の爲めに  
斬殺せられむと。是を以て賛成者  
其の初は少かりしなり。

第三の農商に歸するといふことは  
大議論もなき事なるも、是は前途  
を見限りたるものにて、武士の魂  
たる兩刀を抛ち、直に百姓町人に  
伍するとなれば、餘程思ひ切りた  
る者にあらざれば出来ぬとなり、  
されば實行者は最も少數なりし。

前にも述べし如く血氣壯なる者は、  
早くも脱走從軍したれば、結局舊幕人  
士の瓦解後向ひし方向は、右の三途を  
併せて都合四途なりしなり。さて無祿  
移住者は家を擧げて、駿遠參の三國に  
赴き、數年居住したるも、故郷忘れ難  
く、且つ辛苦に堪へざるより、一人出  
京し、二人出京し、いつしか其の七八  
分は再び東京に戻りたり。朝臣したり  
し者は、動かすして其の所得、食祿  
も他に比すれば多く賜り、身も亦無事  
なりしかば、遂には羨望せられ、先づ捷  
利を獲たる姿なりき。農商に歸せし者  
は、大抵失敗し、悲惨の境遇に陥りし者  
多し。蓋し決著の當時は何れか其の家  
の爲になるや判断附かず、恰も吉凶の  
神籤を探るが如き想ひありしなり。

たく候間、米金共同斷之旨不、洩様  
末々迄相達候様可、被、致候

來六月御切米并御扶持方共、御  
受納高無之候ニ付、取調候迄被、  
下間敷候旨被、仰出候

とあり。祖先以來食祿ニ離れしことな  
き諸士が、俄にかゝる窮厄に遇ひ、且  
ついつまでかくして居るや、前途茫漠  
たれば、其の心配は一方ならず、金持  
は別に驚くべき筈なけれども、武士  
にして米を買ふといふことが、劈頭第  
一に驚されしなり。

從來知行取りハ其の采地より、藏米  
取りハ淺草米廩より、苞米を受取り、  
專業者たる米搗て搗く今ハ絶えて見ず  
命し、精白米と爲し、食用に供し來り、  
其の直段の果して若干なりしやを知ら  
ざりしに、一朝之を受くる能はざるに  
至りしは、未曾有の珍事なれば、「愈々  
町人と同じく米を買ふやうになりた  
り」とて、齊しく痛嘆したるは、無理な  
らぬことといふべし。我家にてハ俵入  
りの玄米を買ひ、近所にて蹈白を借り

遠州濱松在に移住したる者の話に  
高四百石の士にて、六人扶持を賜  
りたるよし、其住居といふは、所謂  
御長屋にて、六疊と四疊半並に臺  
所にて、先日までは大玄關内玄關  
使者之間表座敷奥座敷等ある大厦  
に住みて、用人侍小侍仲間并に女  
中三四人を使用したる殿様奥様が  
土鍋を提げてかゝる陋屋に居住す  
るとは、實に夢の如くなりしと。  
終に住み馴れし故郷に歸り來りし  
は、無理ならぬことといふべし。

○道具は二束三文

無祿移住者は、家屋敷は勿論のこ  
と、道具も遠路といひ且ハ雜沓の際な  
れば、之を携へ行くことならねば、賣  
拂ひて金となすを專一とせり。所謂二  
束三文の直段なれども、道路に乘るよ  
りは「マシ」なればとて、惜氣もなくう  
り飛したり。大御番たりし三橋氏の妻  
女今や七十六歳なるを訪ひ、當時の實  
況を聞きしに、三橋家には貴重の什器  
多かりしが、先づ長持に一杯詰めたる  
を三棹賣りたり、道具屋來りし時、彼

等はいかに取出して調ぶるやと、傍に  
見てありしに、彼等は一寸と長持の蓋  
をはねて一目したるまでにて能くも見  
ず、直ちに蓋を爲し、三棹にて金參分  
十五錢なりといふ、又雛人形并に其の  
道具悉く具備しありて、葛籠に二つあ  
りしを、金貳錢五厘なりといふ、  
是にて御意に滿されば、御免を蒙らむ  
といはれ、已むなく賣拂ひたりと。此  
長持の内には名畫幅も澤山ありしとい  
へば、今の入札會などに持出したらむ  
には、或は一輦にて萬圓以上の高價を  
呼ぶものもありしなむ、時勢の變遷  
は如何ともしがたし。疊建具の如き、  
殆ど願る者なし、芝邊の大名屋敷にて  
は、門前に疊數百帖を積並べ、一枚五  
十文位にて、何人にも請ふがまま  
に賣拂ひたりと。

○食祿の喪失と新賜の實況  
舊幕人士にして、一時全く食祿の給  
與を受る能はざりしに至りしは、最も  
閉口したり。戊辰四月廿日、  
徳川家御納高更ニ無之候ニ付而  
者、差定候御入用向其外共相渡か

等はいかに取出して調ぶるやと、傍に  
見てありしに、彼等は一寸と長持の蓋  
をはねて一目したるまでにて能くも見  
ず、直ちに蓋を爲し、三棹にて金參分  
十五錢なりといふ、又雛人形并に其の  
道具悉く具備しありて、葛籠に二つあ  
りしを、金貳錢五厘なりといふ、  
是にて御意に滿されば、御免を蒙らむ  
といはれ、已むなく賣拂ひたりと。此  
長持の内には名畫幅も澤山ありしとい  
へば、今の入札會などに持出したらむ  
には、或は一輦にて萬圓以上の高價を  
呼ぶものもありしなむ、時勢の變遷  
は如何ともしがたし。疊建具の如き、  
殆ど願る者なし、芝邊の大名屋敷にて  
は、門前に疊數百帖を積並べ、一枚五  
十文位にて、何人にも請ふがまま  
に賣拂ひたりと。

家族の者之を搦きたり。白を借ると吐  
はぬ時は、一升位宛大徳利に入れ椀捧  
にて徐かに搦きしことなど記憶せり。

徳川家の舊臣にして朝臣となりし者  
に對し、戊辰八月廿二日食祿下賜の御  
沙汰あり、九月朔日より夫々高に應じ  
割合を以て藏米を給與せらるること、  
なりたれば、一同の喜はいかばかりな  
りしぞ、再び祿にありつきたるわけな  
れば、漸くに安堵の思をなし、辰ノ口  
元傳奏屋敷會計局へ請取の爲め出向き  
たり。其の時の制度ハ左の如し。

萬石以下五千石迄	千俵宛
五千石以下三千石迄	五百俵宛
三千石以下千石迄	三百俵宛
千石以下五百石迄	二百俵宛
五百石以下三百石迄	百五十俵宛
三百石以下二百石迄	百俵宛
二百石以下百石迄	五十俵宛
百石以下四十石迄	四十俵宛

是まで俵取の者も同斷にて、扶持米  
は廢せられたり。但これは臨時の定に  
て、同年十二月二日に至り、祿制二十  
一等を制定せられたり。



# 種六城春筆隨

早稻田大學出版部 行發

振替 東京牛込  
大阪六八九〇三  
圖書目錄進呈

市嶋春城著

出版界驚異の賣行を示した  
天下獨歩の隨筆集!

六種 六種内容の一部

- 一 感興深き追憶
- 二 獄窓舊夢談
- 三 圖書その折々
- 四 趣味談探餘
- 五 意外録
- 六 衝口發

獨得の明斷と情趣と氣品と、惜し氣もなく筆端に生動し、親しく膝を接して語を交へるの感あらしめる。

四六判六百頁 定價貳圓八拾錢  
總布函入美裝 郵稅拾貳錢

○之友昆田文二のの化念報を編纂者二竹余と  
の主筆を流し大要左の如く定む

- 来年秋迄完成
- 枚数約二百頁
- 発行部数二千部
- 発行後昆田
- 編輯者 藤田貞敬
- 材料 蒐集振任

早大方面 家笑 小林堅三  
古川方面 茂田昌夫  
御 里 土田赤次郎  
岡山 山本 小 林 節  
銀行 分社



一 内容大略左の如し

序文

略百年譜

本傳

追懐談

逸事録

遺影

遺墨 墓感

墓誌 墓感

一 経費約三千圓

全部書の附：據らうち木十三郎

挽任出 多のり

右を日ち木十三郎と協議の上決り此の家  
古川家源解満  
九月廿四日記



入道居士活や

静養す る、いや諸君

はわざと見送つてくれんでもよ  
いさ」と話しながら右手を禿頭へ  
のせる癖を盛んにやつて愛嬌笑ひ  
のわしの糖尿病は卅年來のもので  
これについては面白いことがある  
よ、この間軽井澤へ行つて市島氏  
の「春城隨筆」を讀んでみると廿  
年前わしが市島氏を診察してゐた  
時のことが書いてある、市島氏は  
同じ糖尿病でわしから酒を禁じら  
れてゐたのに旅順開城の號外を見  
て酒を飲んだ「それで入澤はしる  
ことをたべて糖尿病になつたんだ  
酒の味 なんかわかる  
ものか」と書いてあつたので思は  
ずふき出して隨筆を讀むのをやめ  
た、……早稲田の醫學部長は噂だ  
けでわしはいかんよ」と自動車で  
引きあげて行つた

出づ 詠味の人は遠く生くべき道を見  
出す 今春秋中讀んだのである  
がその後讀んだもので、  
一、人類學雜誌に連載された柳田  
國男氏の「蝸牛考」である、蝸牛  
の名に依つて日本語の分布とその  
變化を考證した獨創的研究法は日  
本の言語學者に刺激を興へたとい  
せられる  
森 繁夫  
市島春城氏著「隨筆春城六種」を  
一寸手にしましたところ、さうも  
面白くて、しかし宅では讀む  
ひまがないので、さうく毎日の  
電車中で、十日あまり費して讀了  
しました、首尾一貫興味と趣味  
溢るるもので、その多方向に渉る  
ところは、百種雜興といふ魚を、旨  
い味をつけて、料理したやうに、  
近頃面白く且有益に讀みました深  
く著者に感謝いたします。

石割松太郎

近頃讀んだもので、記憶にあるも

# 稀書複製會々報

第五期 第十一回

昭和二年 九月

## 第五期 第十一回配布本解説

鳥の歌合 一冊 (原本、岩崎文庫藏)

本書は『四生の歌合』四巻中の第二巻にして、既刊『蟲の歌合』、『魚の歌合』と様式を同する木活字版の丹縁本なり。既記の如く作者も刊行年月も開版所も不明なれども、その版式彩色法等より推測すれば、寛永もしくはそれ以前なることは知らる。その事は蟲、魚『兩歌合』の解説に詳述しおきたればこゝには省略す。(『稀書解説』第四編参照)。

この『鳥の歌合』は『蟲の歌合』に倣ひて、鶺鴒が蟲類間に歌合の催しありしを聞きて羨み、歌に縁ある鶯を説客として、魚類や獸族を説かして各自に歌合を開催せしめ、風流三昧に懐ひを述べて優しき容姿を競べんと誓ふ。さて鳥類は羽毛の麗しき鶯

鳥を然るべき氣高き姫君に見立て、諸鳥の之れに戀ひするさまを趣向とす。これに亞いで魚類、獸族も激勵されて歌合の催しをなしぬ、云々。本書は其事を序詞に述べて『四生の歌合』の興行ありし所以を先づ諧謔的に説明す其紙數五丁半なり。次に目次が一丁、本文が廿丁半、總紙數廿七丁なり。三十種の鳥類を以て歌主となし、別に判者を置き、戀の歌十五題を選びて歌合の形式によりて勝敗を定めたり。歌體は俳諧歌なり。その番組課題は左の如し。

- |   |    |         |   |    |   |     |
|---|----|---------|---|----|---|-----|
| 一 | 一番 | 嘴太に口説く戀 | 左 | 鶯  | 右 | 鳥   |
| 二 | 一番 | 野山を尋ぬる戀 |   | 山鳥 |   | 雉   |
| 三 | 一番 | 囀りかはす戀  |   | 山雀 |   | 四十雀 |
| 四 | 一番 | 餌につまる戀  |   | 雀  |   | 鳴雀  |
| 五 | 一番 | 初音をきく戀  |   | 杜鵑 |   | 鶯   |
| 六 | 一番 | 羽根を交す戀  |   | 燕  |   | 駒鳥  |





















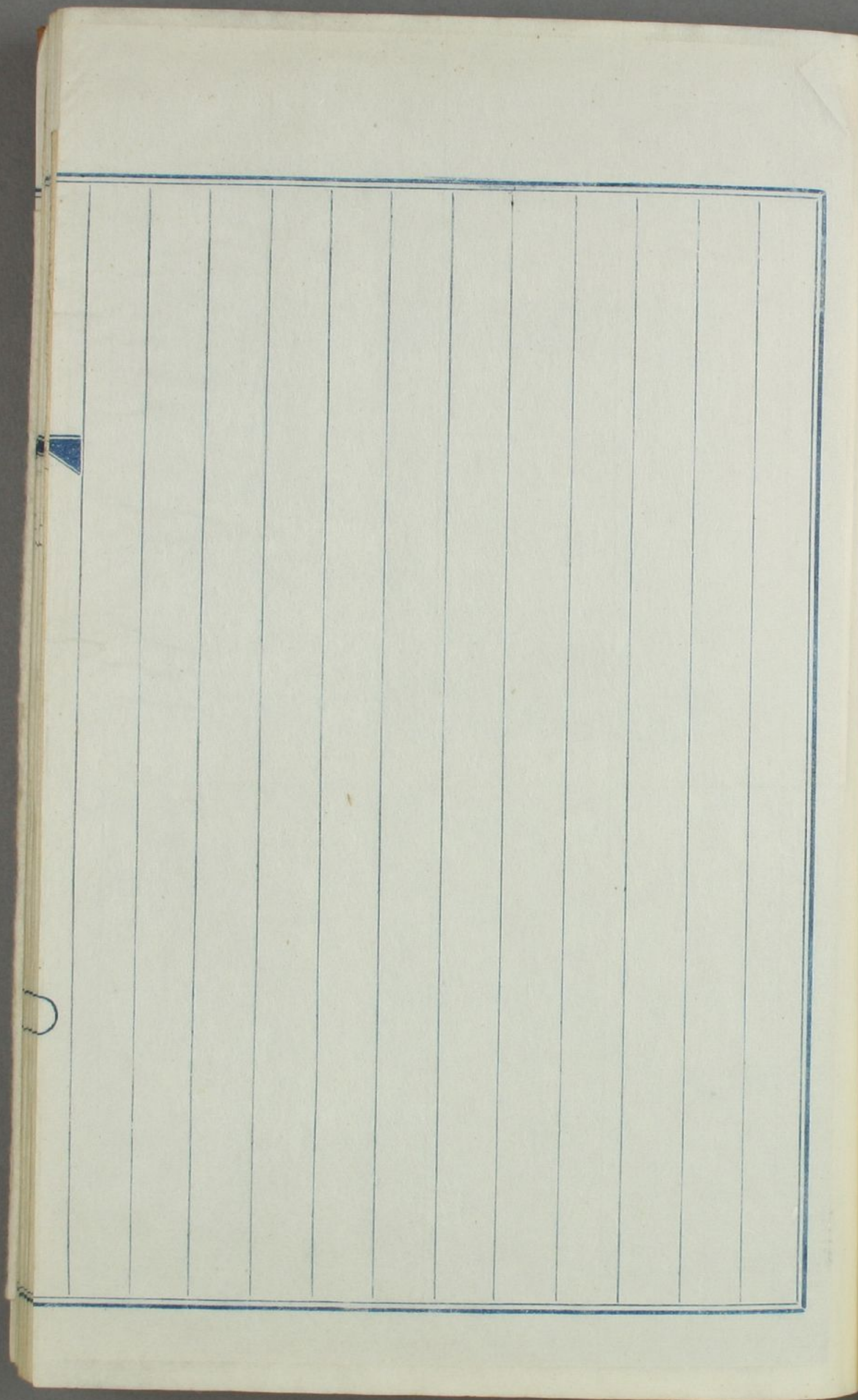


すま金目腐の類を畑地に埋もるの失態あり、宛から内科と外科とを連絡充分するが人も死と生とを一般也、大工もあつたは植物に就ての理解也

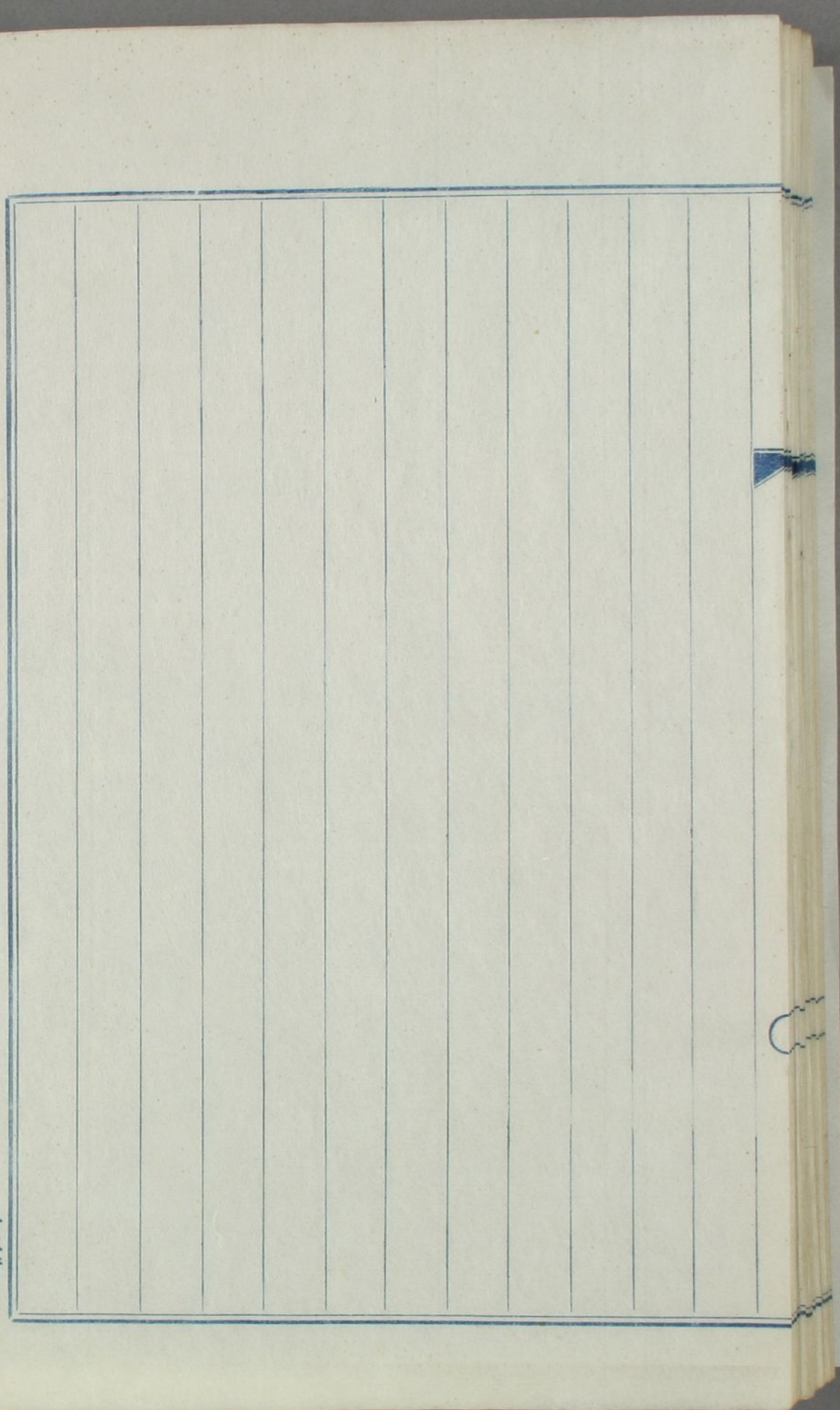
一 著作の結果多く腐を以て作末に因りて幸々梁山の方面のシガウに材木を以て心づかひ、之を修理するに石林を以てすん一方は末に因りて腐物を以てる若代不朽のシガウにも心づかひ、此方あるを以て一可換木腐をも考へし思ふの思ふも皆片付く、こゝ亦一情也

一 舊雨の腐材果々として未だ片つらう、腐根を以り花壇を築き物を建つるの用は元つべし、腐物は因りて多く、敢て掃ふる及ばずして吐き手近に用材あるに便利におもひ、追々此等の経年、用ひてる数あることあり、割つて燃料として供せし、思ふに数月も支ふる新材を得べし





十二行







羅馬使節 (院展出品)

前田青邨



花耕村山 (展院) 分 附

〇余の愛主圖書自  
 録卽刷成六通針  
 百二十二頁、此の大  
 目録ハ空前也、別  
 二綴者、荒干、古、目  
 録ハ入、能ハ、而  
 子、是、之、地、幸、心、の、人





羅思對宿 (繪畫出品)

花耕村山 (展院) 分

前

田青池

〇家世の院長余刊  
 〇出石の園を  
 〇二園を収め  
 〇余の愛主園有  
 録印創氏六通針  
 〇二十二年此の大  
 〇室前也別  
 〇荒干あり目  
 〇能ハル而  
 〇上坊守心の人



氣よとすも乃ち左に収め 十月廿日記  
 ○高須世方中印の在方の星に余の地帯に待あり

『春城隨筆』に就て

秋燈親むべき候、私は不圖、架上にある『春城隨筆』を手にして靜かに親んだ。市島春城先生の趣味廣博にして、あらゆる事物に通曉してならるゝことは、平生、先生

の座談を拜聴したもので、能く知る所で、その座談の延長、座談の精粹が結晶して本書となつたかの感がある。本書は「雅俗相半録」百十項、「趣味談叢」十四項から成る。「雅俗相半録」のうちには、史上未だ知らぬエピソードが多い。また東西の文物に關する奇談も少なくない。讀んで肩が凝らす

に面白い。趣味談のうちで、特に先生の本色を發揮したのは「印の趣味」「酒趣百則」「水百態」などで、これ等は先生でなくては到底書けぬ。後續して飽く事を知らない近來の隨筆中傑出した物として本書を薦める。(早稻田大學出版部發行定價二圓八十錢)

○山崎西洋(東)藥材と日本の製法を引用する  
 と性行の優るものあり、此の早稲田と違つた  
 摸倣の優るものあり、此の早稲田と違つた  
 大隈先生の念の大講を外装の煉の瓦の如  
 き一見驚く流のき致味を感ずる其の煉瓦

十二行

- |    |      |     |   |   |    |    |
|----|------|-----|---|---|----|----|
| 別三 | 僧    | 尼   | 孽 | 海 | 寫本 | 一冊 |
|    | 畫餅居士 | 春風草 | 同 |   |    | 一冊 |
| 別四 | 逸    | 著   | 聞 | 集 | 寫本 | 一冊 |

三國 畫餅居士 春風草 同 寫本 一冊  
 逸 著 聞 集 寫本 一冊



摸倣の優るものあり、此の早稲田と違てなる  
 大隈の流石の大講を外装の煉の瓦の如  
 き一見驚く流石の味と感す、其の煉瓦

別一 あか井の月 冷泉爲義彩畫 箱入 一巻

別二 房中閨門王話 素役者志 一冊

素役者志 多 一冊

修色諸 國物語 一、二 一冊

別三 風流色圖法師 三馬舊藏 二冊

嬉樂勸進能 一冊

三芝居客者評判記 三冊

別四 去垢集 一冊

春 變折甲 一冊

春 風帖 一冊

別五 小犬つれく草 一冊

拾遺枕草紙花街抄 一冊

別六 長枕褥合戰 大本 三冊

別七 客衆肝照子 一冊

遊仙傳 一冊

別八 新潟細見・新潟後の月見 合 一冊

浪花青樓志 一冊

別九 俳風末摘花 四冊

別一〇 毬歌國字解 一冊

安名午本執心廓 二冊

教訓相撲取草 一冊

別二 吉原大 五册合 一冊

吉原詩迷樓候史 一冊

傾城情史 一冊

別三 黃素妙論 寫本 二冊

同 品 寫本 一冊

同 品 刻本 一冊

別三 僧尼孽海 寫本 一冊

畫餅居士春風草 同 一冊

別四 逸著聞集 寫本 一冊

著聞通話 刻本 一冊

著聞通話 活字 一冊

別五 百戰必勝 活字 二冊

癡婆子傳 活字 一冊

如意君傳 舊 一冊

別六 はこや比祕言 板本 二冊

あなをかし 元本 一冊

別七 春窗祕辭 元本 一冊







の何れもを河川の者が伊賀の産とするところ、伊賀  
ハナリ古く磁器を造りたる所を其の製法堅固  
其の原滋味のある所、其の男子的なる所、於て  
飯味家と喜ばれ、古く茶家の交玩する所  
也、其の空気に似て煉瓦を製するところ、  
かゝるんと大規模に應用する所を又ハ此  
の建築に於て始めとする所、粗なる断面、茶  
褐色の斑點、この高一種の凡類ある所、  
ハガリ、ハリと云ふ菓子パンを模したる  
其の断面を又見ゆること、観る、東洋  
趣味の横濱とも云ふ可き、快感を  
与ふる、吾ん此の大趣を於て見る

此の大建築は、確たる、此の大成ゆへ、何  
れも斯る余を、大切する、吾人の微する  
こと、なが、流石と此に於て、於て、注意さ  
る、地下室、入り、好むところ、一方地下  
ドある、が、脱光線を引き、得る、故  
に地上の室より、七、八、九、十、十一、  
十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、  
十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、  
二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、  
三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、  
三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、  
四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、  
四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、  
五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、  
六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、  
六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、  
七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、  
七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、  
八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、  
九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、  
九十七、九十八、九十九、百、



ことを思ひつゝと云ふと余也

十月七日記

○春樹道筆と云ふ今頃ボウク評と云ふはあつた  
首領梅屋の誅前、牧野重と云ふ、二三日前の園式  
新多、新多の誅前、初め、余を以て梅屋の  
才一人と云ふの次、酒中、余を稱し、而も一二の  
談を指摘す、是れ角起人人の異と云ふ、余か  
也

○早大少う、甲午年の記念式典を奉げんとす大隈  
故友を記念する大隈堂も故友友人の銅像、陰謀  
式力、招切、敵つ、無敵式、同時に行ふと云ふ、此時、  
方り、余の喜と云ふ、早大と云ふ、大隈堂との間  
に横の溝、是れ、早大の喜と云ふ、起つた誤解、  
也

十二行

ハ漸やく深く、事毎に打格を生じ、ち山の解、  
も田中、此方の女と云ふ、尚ほ、前校長役中、  
即ち田中と云ふの衝突を生じ、  
職を解、と云ふ、  
ハ前途の以て、喜と云ふ、  
ハ女子心持、  
吟詩の遊、  
誤解を誤、  
之れを知、  
此の事、  
余の擔任、  
の事、







収めこゝに揚げし他の巻を考へて改すといふ

六氏藏の月夜圖も亦此人の筆である。此他にも時様の風俗を描いたものも間々散見するから、後素談叢に『この勝以には風俗畫かけるは絶無なれば、世人が岩佐又兵衛の筆と稱ふる風俗畫は別人の作なること著し』とあるは、過言の失に陥つてゐる。又兵衛の師承は明かでなく、或は土佐光則の弟子と云ひ、或は土佐光茂の門人なりと云へども更に確證なく、土佐の流を汲んだ一畫家であつたが、要するに大家巨匠の列に入るものではない。然るに古い浮世繪とし云へば、必ず又兵衛の筆と云ひ傳へられてゐるのは、此時代に關東には土佐風の今様姿を描くものがなかつたので、又兵衛の名が實價以上に聲譽を馳せたと云ふのも一つの原因であつたらうし、他に又平と名乗りて時代の低級趣味に適するやうな畫を描いたものがあつて、此等が又兵衛と混一したのも亦一つの原因であつたらう。

### 尾形宗謙に就いて

尾形宗謙は京都の人、名は宗甫、字を子柏、宗謙又は浩齋と號した。東福門院の吳服御用を仰せつかつたが、性藝術、殊に繪畫を愛好し、本阿彌光悅の門人兒嶋宗眞に就いて學んだ。斯くして裝飾的畫風を能くしたが、餘技としては上乘のものであつた、遺品は殆んど稀少である。由來血管に廻る傳承の血と、環境の感化影響とは到底これを否むことは出来ない。子に裝飾畫派の完成者にして同時に漆技を能くした偉才光琳と、冥慧恬淡名利をよそにたゞ藝道の一事にいそしんだ、陶聖ともいふ名陶工乾山の出でたのは、決して偶然のことではないのである。貞享四年六十七歳で歿した。

### 三浦乾也傳 (下)

鹽田力藏

前條には、重に石井柏亭氏の談話によつて、乾也の親族關係の事を述べて置いたので、今度は更に大河内正敏氏の講演を參照して、以前の筋と對照的に、その藝術的方面を考へて見たいと思ふ。乾也が小さい人でなかつた事は、前にも述べたが、とにかく五歳までは田舎に育つて、夫から伯母に引取られたのである。その伯母の亭主は井田吉六といふ道具屋なので、茶器を賣る傍らに、樂燒の土人形を造つて、淺草觀音で賣つてゐた。然るに同人は、貧乏の上に道樂者で、乾也が十四歳のころ、女房と娘を置いて出奔したが、伊勢萬古の再興した時なので、本人自ら陶藏と名乗つて、萬古燒の陶工になつて仕まつた。併し乾也は伯父の居る頃から、土人形の手傳をして、仕事を覚えてゐたので、やはり淺草の仲町邊の家から觀音に通つて、手捏ねの人形を賣りながら、伯母とその娘を養つてゐたのである。

ところが吉原の町名主に、西村佐平といふ風流人があつて、近衛流の書風を習つて、三藐院の一字を戴いて、藐庵と號してゐた。そのころ吉原で豪遊して酒井抱一と懇意なので、抱一に傳はつてゐた乾山の傳書は、更に藐庵の手に傳はる様になつた。それで藐庵は淺草の人丸堂に隱居して、自ら樂燒を



道樂にしてゐたところ、淺草の通りがけに乾也を見附けて、面白く思つたから連れて来て、その樂燒の手傳をさせたのである。

一二

その中に乾也も十九歳になつて、伯母の一家を支へて往ける様になつたので、夫から谷文晁について、繪の稽古を初めたが、やはり樂燒も續けて來た。さて破笠風の作品に倣つて、漆器の表面に陶製の小細工品を嵌入したものを作り初めたのは、その二十四歳頃からであるが、是も世間に持てはやされて、技倆もいよ／＼進んで來たので、藐庵の方でも一層可愛がる様になつた。そこで藐庵の世話により、深川八幡の石井佛心の養子になつたが、親子仲が不和になつて、女房と共に同家を飛び出した事は、前條に記した通りである。

しかしこの頃は、乾山は陶工の方でも、笠翁細工の方でも、可なり有名な技術家になつてゐたので、當時の大名方にも出入して、それらの注文品を作つてゐたから、この時代の傑作品も残つてゐるのである。その作品の例については、越後侯の求めによつて、大きな衝立を焼いた事もあるが、實は蜂須賀侯と松平確堂侯とが、乾也を困らせるために、態と大きな物を造らせた次第なので、乾也はこれがために大窯を新築したほどである。殊に確堂侯は、最も難題を出されて、大小の鞘に百鬼夜行の陶製品を嵌め込んだ、笠翁風の細工を命ぜられたが、細身の丸地に大蛇が巻き附いてゐるなどのため、何十遍も燒き直した、最も苦心の作なので、今も松平康民子の家にあるといふ。尙ほ蘭亭の圖を嵌入した袋戸も、同子爵家

にある筈である。乾也は元來、養父母の機嫌も取れぬ様な癖なので、出入の諸大名にも世辭を使はなかつたから、大名の方でも面白がつて、右等の難題を出されたものとの事である。

一三

その中に嘉永六年となつて、浦賀に黒船がやつて來たのを、乾也も見物に往つて感心して、海防のために蒸汽船を造らうと心掛けた。この頃の乾也は、大名方の注文で金にもなつたが、酒のために貧乏なので、淺草壽町の朝鮮長屋といふのに住んでゐたが、その長屋の近くに蘭法醫があつたので、その醫者から和蘭語の本を借り、それを讀んで貰つたり、その圖を見たりして、紙を以て三つの船の雛形を作り、それを水戸家と津輕家と阿部閣老とに献上し、日本で汽船を造るの必要を建白した。夫から阿部伊勢守に知られ、安政元年に幕府から造船の練習方を命ぜられ、士分に取立てられて、勝安房守と共に長崎に赴き、和蘭人から造船の事を習つたのである。然るに乾也は、造船のために必要と考へて、兼ねて硝子の製造や、鐵のための熔鑪や、大砲のための反射爐までも、約一年間に學んだが、やはり海舟とも喧嘩をして、一人で江戸に歸り、翌安政二年には、長崎研究の圖書を整へて、幕府に復命した上、自ら造船の事に當らうと請うたが、それは許されないで頗る不平であつた。

その時に仙臺の伊達家では、洋風の船を造る人を求めてゐたので、儒者大槻習齋の紹介により、幕府の許しを得て、乾也は仙臺藩に抱へられ、安政三年に赴任して、士分に取立て

られ、百石二十人扶持を賜はつた。そこで松島の寒風澤(サムサハ)に造船所を建て、船を造つた外にも、種々の機械や窓硝子までも造つた。安政四年にその船が出来たので、開成丸と命名されたが、乾也は同所でも陶器を焼いてゐたのである。さてその船で、安政五年には仙臺藩の海岸を乗り廻し、金華山沖では暴風雨さへ乗り切つて、遂には品川灣までも漕ぎ出して、江戸の友人連を呼び寄せ、日本初めての汽船とか軍艦とかいふを誇つたが、本人一生の得意であつたらうといふ。夫から石井佛心との仲も直り、安政六年には自分にも養子を貰ひ、その後佛心が歿した時、自分の養子を石井家に譲つてやつた。即ち今の柏亭氏との關係が複雑になる次第である。

一四

乾也の仙臺往來は引續いて、同藩のために金策した事もあつたが、その後に至り、同人を引立てた家老が退いて、反對黨の時代となり、乾也も罷められて、江戸に歸つて來た。間もなく維新となつて、又も仙臺に赴き、江戸に歸つて見れば、忽ち官軍に捕はれた次第は、前にも述べた筈である。

さて明治二年になると、乾也は小田原で陶器を試み、夫から武藏の飯能(ハンノウ)でも燒物をした。(この飯能燒は天保に初まり、嘉永に改良されたもので、前代香山の横濱に開窯した頃も、この地の陶土を試みた筈である。)翌三年には横須賀で、硝子と窓硝子を作つたが、夫から小菅で煉瓦を燒き出した。次に深川高橋邊の陶器は大失敗で、明治八年に向島の長命寺に移り、夫から十三年間の陶工を續けて、同二

十二年十月七日に、六十九歳で歿したが、墓は築地本願寺々中の妙泉寺にある。

一五

以上の経歴から見ると、乾也の性格は、畫界に於ける狩野芳崖に近い所があつて、その一面に工業技術などの工夫が長じてゐた。物理化學の様な知識に至つては、芳崖も及ばない所であつたらう。その山氣の強い方でも亦、芳崖以上のものらしかつた。維新前に、大阪で銀を買ひ占めやうとして、大失敗を見たなどはその一例であらうと思ふ。

乾也の家に傳はつた乾山の傳書なども、二十四回で質入した儘に、乾也が歿した後、大槻如電氏が受け出して、今では池田成彬氏の所蔵になつてゐる。この傳書は、初め乾山が仁清の傳書を研究して、それに乾山自身の経験を附記した様なもので、「仁清曰く」とか「乾山曰く」とかの文句が見えるものだといふから、曾て本誌に連載した「陶器密法書」とは別物たるに相違ない。

一六

大河内氏の見るところでは、乾也は江戸陶工の第一であるといふ。前記の乾山の傳書について、その傳來の順序を數へたのを見ると、伊八乾山といふ人が二代目で、次に三世乾山といふ平凡な陶工があつた。夫から傳書が酒井抱一に移つて、それが四代目で、次は西村藐庵に移つたのが五代目となり、夫から乾也に傳はつて六代目となる譯だが、實際の陶工であつたのは、乾山と三世乾山と乾也の三人だけで、乾也は六世と稱へながらも、自ら乾山とは記さなかつた。乾也が江戸の下



町氣分を出してゐる點は、乾山の閑寂味と相違する所だといふ。而も乾山風を寫して成功したものは、乾也の外にはあるまい、とまで見られてゐる。

乾也は曉齋とは仲が好かつたけれど、是真とは餘り好くなかつたとも云はれる。乾也は長命寺で、根掛けや簪の玉を焼いて、乾也玉として流行したものだ、筆者も若年の頃に記憶してゐる。

一七

さて乾也の後に、浦野乾哉といふ陶工があつて、入谷乾山の跡を慕ひ、戸籍上の手續を経て、自ら尾形乾山となり、下谷に開窯してゐて、英人リーチ氏その他も出入したが、大正十二年の地震の頃に致した筈である。明治十二年の東京府の名工鑑によれば、この乾哉の傳は見えぬけれど、乾也の傳記は記されてある。

右は本人から書き出したものらしいが、南葛飾郡須崎村の三浦乾也は五十八歳とあつて、その長所は古代模造、製品の種類は茶器、置物、香爐、動物、花卉と見える。明治十年の博覽會には、龜に芙蓉の額面を出して、龍紋賞を受けてゐる。

(筆者の記憶では、博物館にも蘆雁の額があつたと思ふ。) 夫から本人の傳記を見ると、十二歳の時に伯父の井田吉六について製陶術を習ひ、十七歳の時には、吉六と共に西村菟庵宗仙について、乾山焼の傳法を受け、乾也の號を許されて、十九歳の時に開業し、丸屋利平の注文品を造つたが、尙ほ菟庵から陶器の鑑定を習ひ、古器の模造を研究し、更に漆工寛次郎について、漆器の製法を學び、二十二歳より古人印觀子

笠翁の作品を見て、金銀珠玉及び陶器類の嵌入を研究し、夫から武州ハンノウに本窯を立て、石焼、土焼、和漢の古器を模造した。その後、三十三歳の時、幕命によつて造船術を長崎に傳習し、同年歸京の後、仙臺藩の命により、水面十五間の風帆船を造り、續いて同藩士となり、四十六歳の時に致仕して、歸京してから、明治元年より陶業に復し、同三年には、小田原の十日市場で本窯を設け、インスレートを製したが、同六年には千住の小菅で煉瓦石の教師に雇はれ、その後一年を経て向島で陶器を造る様になつたのである。

一八

この自傳らしい記録によれば、後人の調査とは相違の點もあつて、而も一層確實らしく思はれるが、今さら一々その異同を指摘するにも及ぶまいと思ふ。併し中々の大相違も見え、るから、篤と前後を對照して見られたい。是から考へると、後人の推測中には、誇張の記事があるかも知れない。中でも吉六との關係が違ふし、殊に飯能燒の事が造船の前になり、夫が本窯燒の古物寫しであつた。夫から開成丸は汽船ではなく、帆船船であつたと見える。尙ほ小菅の煉瓦燒も、教師に雇はれた事になつてゐる。又曉齋との間柄にも相違がある。(念のために日本近世造船史を調べて見たが、乾也の傳習は最も早く、却つて記録に漏れてゐるし、又開成丸は一小事件らしく、是も記載されてゐない様である。)

△前號五頁下段の末に「小菅」とあるは「小菅」

○此の邦の世の映畫を見る、興味を覚  
へたるをアレキサンダー、ジロウの原心と  
あつて、其の精進也。余、ジロウの此の物語  
を原心と記して、後年、前年友人長岡秋  
清、記して早稲田出版部に出して、ことある  
り、余の讀みたるは、此の物語を、さうして映畫に出  
すもの元、繪師も多く、描寫の儼然たるも、  
いかに、是れも、大家の心、さうして、  
深みあるも、さうして、今日、米田の、  
面を、表し、此の映畫の、ゆゑ、婦人、入浴の  
事あり、即ち、米田、ぬき、其、教、て、祝、慶、  
改姓、及、住、し、七、書、を、著、し、し、の、あ、り、や



すもお尋ね者の詐欺師アラツキ・モルガンである事に気が付き、友達であるフランニガンとハリガンの應援を得て、ハロルドの後を追跡し首尾よく捕へて、大手柄を立て、遂にマツサを妻とする事が出来た。

平日 午後二・三〇 午後三・三〇 四六四〇  
 土日 午後二・五〇 午後三・五〇

(4) 管 絃 樂

歌劇「トラヴィアター」よりチエツペ・ヴェルティ曲  
 日本交響楽協会演奏

交 藤 山 田 耕 作  
 指 揮 平 野 圭 水

(5) 椿 姫

今週は映畫「椿姫」に因んでヴェルティの名曲「トラヴィアター」を演奏していただきます。彼の繊細華麗な旋律は映畫のもつ魅力以上に人々の心をさらへずにはおきません。

平日 午後二・四〇 午後三・五〇 四八〇〇  
 土日 午後二・四五 午後三・五〇 四八〇〇

● キヤスト ●  
 マーゲリット・ゴージェイ (椿姫) フォーマタルマツサ嬢  
 アルマン・デュヴァル ..... キルバートローランド氏  
 ナニム ..... ヘルン・シエローム・エディ嬢

ヴァグイユ男爵 ..... ハーヴェイ・クラーク氏  
 オリン ..... リリアンタツシユマン嬢  
 シオモン公爵 ..... アレリック・フランソス氏  
 デュヴァルの父 ..... モーリス・コステロ氏  
 アルテンス ..... ローズ・テイオンス嬢  
 マーゲリットの父 ..... ミハエル・ヴィサロフ氏  
 マーゲリットの母 ..... エヴェリン・セルヴィ嬢

梗 概

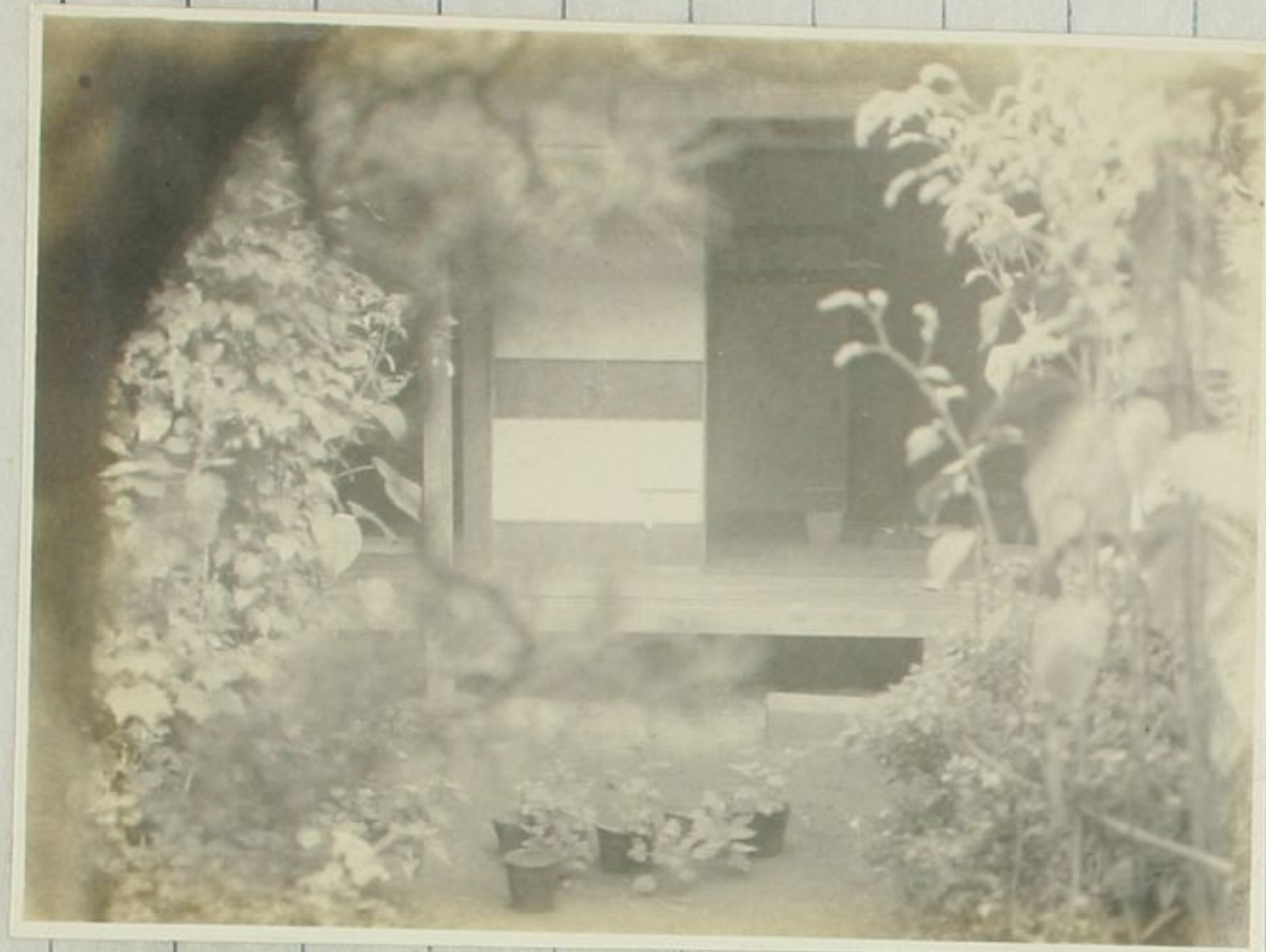
浮れ女と淫婦と云はれた椿姫は、嘗ては純情の處女マルゲリットであつたが、後妻の愛に溺れた父親の殘忍な折檻の咎に彼女を墮落への道に追ひ放つたのだつた。それから一年後巴里つ子の口の端に噓しかつた椿姫こそマルゲリットが涙を包む笑ひの假面だつた。公爵、伯爵、百萬長者等々が彼女を巡る男は多かつたが肺を病む彼女を憐れみ愛する者は嘗て無かつた。その頃彼女の家に向ひ合つて住んでゐた多恨の若人アルマンは人知れずマルゲリットを愛してゐたが、或る夜オペラで二人が相逢ふ機會を得て後は、浮れ女の椿姫ならぬ純情のマルゲリットになつた彼女に心から愛が生れた。かくて解かな近郊に二人の愛の巢は営まれ、マルゲリットは正しき女として蘇つたが、愛兒を思ふアルマンの父の心からの願ひを斥け兼ねて彼女は愛人を棄てればならなかつた。彼女の眞情を知らぬアルマンは怒つた。其の後狂歌のナイトクラブに於いてアルマンの爲めに衆目の前で飽くことなき侮辱を加へられながら愛する故に耐え忍んだマルゲリットは、やがて病漸く篤く、降誕祭の鐘の鳴り響く夕べ、降る雪と共に愛人の面影を抱いて儚なく死んで行つた。

平日 午後三・一五 四七四〇 四八三五  
 土日 午後三・一五 四七四〇 四八三五

美の部分を断裁せしめると他早可なり  
 シウキヤ交あり、部くのことき烈しき刺激を  
 米人の古くふと忍くやう、此部樂座を米人の  
 狂言に倣ふ、翻案中外人殊々多し、十月  
 十日記

○その後少島と徹と漸やく改善のちわも後  
 えとす、三月初旬移つてとんと出指満七月  
 今とえんとす、又路ありありの感なき然らず  
 情を書きおに空のす、君が愚者や春城六程  
 川北舟中する生んた、吾人のあに謝する不  
 ちんとす、高七赤采りして吾人と遊して可也  
 改姓及に住し七書を著し、字、よのあ、や





庭園の秋草



門



書斎  
牛久保  
九書  
地蔵  
四  
号



茶室











萬五千圓と云ふも、いふ所の積んと云ふべき也  
定より、五萬圓を突破すべし三割の千数を  
引くも三万五千圓を得べし、較之、遺域と感  
し、一寸餘の積算が四千六百圓に及れし事  
ことある、元出、五千圓と云ふも、時と期と  
あるも、一二破換の位とあり、いふ所の積  
書、積算の物が二万圓以上と云ふ事、こと  
禁、氣が同一く二万圓以上と云ふ事、こと  
積算の積算、積算の成敗、元の出、積算  
品の善悪、いふ所の積算、いふ所の積算  
を一、本に及、却、す、いふ所の積算、いふ所の積算  
十月十七日の朝記

○更なる記す、其後の報に據る、いふ所の積算、  
万千圓といふ、四万圓の積算、いふ所の積算、  
算する、いふ所の積算、いふ所の積算、  
最、七、百、圓、とあり、いふ所の積算、  
と印ある、法、算、算、いふ所の積算、  
いふ所の積算、いふ所の積算、いふ所の積算、  
いふ所の積算、いふ所の積算、いふ所の積算、  
○十年書、いふ所の積算、いふ所の積算、  
いふ所の積算、いふ所の積算、いふ所の積算、  
いふ所の積算、いふ所の積算、いふ所の積算、



PEREGRINAÇÃO  
DE  
FERNAO MENDES  
PINTO,

E POR ELLE ESCRITA:

QUE CONSTA DE MUITAS, E MUY ESTRANHAS COUSAS,  
que vio, e ouvio no Reyno da China, no da Tartaria, no de Pegú, no de Martavao, e em outros muitos Reynos, e Senhorios das partes Orientaes.

E TAMBEM DA CONTA DE MUITOS CASOS PARTICULARES,  
que acontecerão assim a elle, como a outras muitas pessoas;

E NO FIM DELLA TRATA BREVEMENTE  
de algúas noticias, e da morte

DO SANTO PADRE MESTRE

FRANCISCO XAVIER

Unica Luz, e Resplandor daquellas partes do Oriente, e nellas  
Reitor. universal da Companhia de Jesus.

E AGORA NOVAMENTE CORRECTA, E EMENDADA.

ACCRECENTADA COM O ITENERARIO

DE ANTONIO TENREIRO,

Que da Índia veio por terra a este Reyno de Portugal, em que se contém a viagem, e jornada, que fez no dito caminho, e outras muitas terras, e Cidades, onde esteve antes de fazer esta jornada, e os trabalhos, que em esta peregrinação passou no anno de 1529.

E A CONQUISTA DO REYNO DE PEGU  
feita pelos Portuguezes no anno de 1601, sendo Vi-Rey  
da India Ayres de Saldanha.



LISBOA:

Na Officina de JOAM DE AQUINO BULHOENS.

Anno de M. DCC. LXII.

Com todas as licenças necessarias.

A' custa de Luiz de Moraes mercador de livros, morador na calçada do Moinho de vento.

稀本外国書類 (一) 日本(種ヶ島)へ初めて来た葡人。メンデス。

ピントーの東洋旅行記の(タイトルページ)

倒し五萬の金を高麗で得たり亦一快とすべし想ふ  
量甚きまあるは其集の者間を友人に譲つて二  
萬の資を得て家書を猶心其後書畫を  
つて七萬五千の資を得て出政部の株を購ふ  
皆其資産の轉換也亦死の仕度也



記念式典關係事項

十月十九日(水曜) 大隈綾子乃自銅像除幕式

午後三時 大隈會館庭園

同 二十日(木曜) 招魂祭(式服着用)

午前九時 大隈會館庭園

同 同 (同) 記念式典(式服着用)

午後二時 新築大隈講堂

同 同 (同) 立食饗應

午後四時 大隈會館庭園

同 同 (同) 記念講演會 第一日

午後六時 新築大隈講堂

同 廿一日(金曜) 學園(新築講堂ヲ含ム)一般縦覽

午前九時ヨリ午後五時マデ

同 同 (同) 高田早苗氏園遊會

午後一時 大隈會館庭園

同 同 (同) 記念講演會 第二日

午後六時 新築大隈講堂

同 廿二日(土曜) 學園(新築講堂ヲ含ム)一般縦覽

午前九時ヨリ正午マデ

同 同 (同) 記念講演會 第三日

午後六時 新築大隈講堂

同 廿三日(日曜) 秋季校友大會(家族同伴)

午前七時ヨリ新築大隈講堂及

大隈會館庭園

同 廿四日(月曜) 學園(新築講堂ヲ含ム)一般縦覽

午前九時ヨリ午後五時マデ

以上



大隈侯記念講堂開館式のにぎはひ



# 都の西北に 一大偉観

## 早大講堂開館式

きのふ盛大に舉行さる

故大隈侯の記念事業の一つとして  
先頭早稲田学園にこつては由緒  
深い大隈侯跡に建築中であつた  
大講堂はいよいよ完成、廿日開  
學創立四十五周年祝賀行事をかね  
て盛大な開館式を

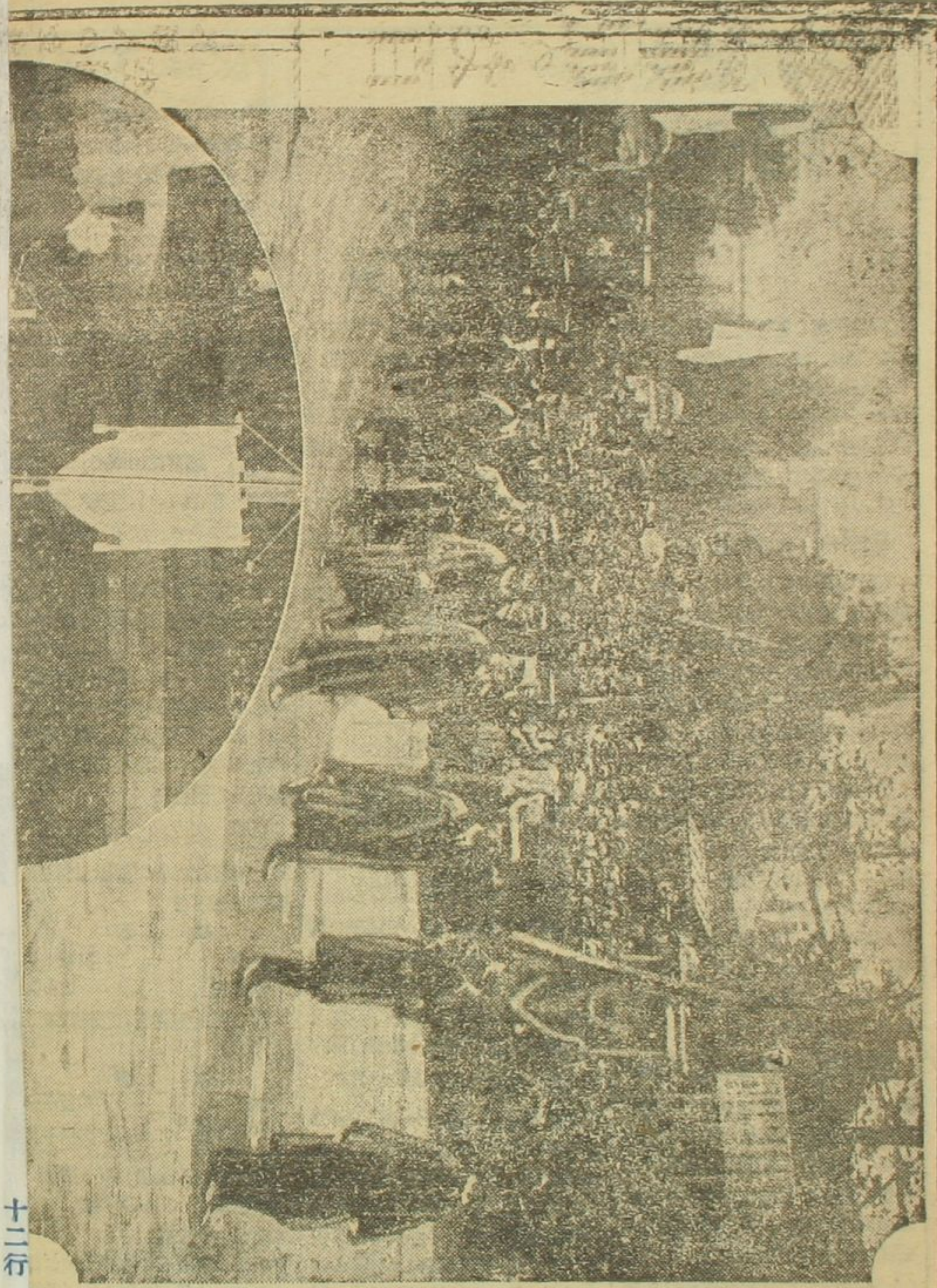
舉げた  
總工費約七十萬圓佐藤博士の監  
督下に興校職員、卒業生が延入  
員約三萬七千人の人夫を使用し  
老侯に報ゆる赤誠と出来上つた  
こいつてもいふ、大講堂は近代  
建築の粋を凝縮した實に見事な  
ものでイス席が無慮五千、立て  
ば一萬人を容れし得る日本第  
一のホールと誇つてゐる、老侯  
が生前遺した百二十五歳に  
ちなみ百二十五尺の美塔が高く  
堅固前にそびゆるあたり一大偉  
觀もある、地下室に千五百人の  
聴衆を容れ得る小ホールがある  
位に廣大なもので音響の鮮はも  
ちろんスピーチは同界の大家岸  
内蔵士の指導を受けたといふ自  
慢のものである

式は算忌より少し遅れて午後二時  
十分から始まつたが來賓は各國  
大公使を始め、朝野の名士約一千  
餘人、學生會計二萬人がギッシリ  
學内は文字通り、ハチ切れるやまな  
盛況で、交誼を先頭にガウン姿の  
先生連約八百人が列をなして入場  
するなき極めて賑はゆかつた、  
難波侯事の開會の時、次で高田  
長が、今から四十年前まだ二十三歳  
の青年時、始めて同校に關係して  
からのよき追憶しつゝ

學校の現状を述べ、田中常  
務理事の報告、佐藤博士の工事報  
告があり、それより遊藝老子舞が寄  
付者側を代表して、寄付金が有意  
義に使はれたのは私が保障するこ

こいつて笑はせ、水野文相が祝辭  
をそののけに二十餘年勤教べん  
をいつた時の思ひ出話から遂に大  
隈老侯に故伊藤公の昔學校の祝賀  
會當時の言の遣辭におよび、あの  
きたない古い校舍がこんなになら  
うとは思はなかつた、こゝれも懐  
舊に堪へない様だつたが、さなが  
ら私立  
大學 遊藝の場面を調か  
される様だつた、校友代表の柳原  
氏の祝辭後大隈侯常侯の講辭が終  
つてから元氣のよいあの校歌を合  
唱して四時四十分閉會、かくて來  
賓一同は老侯が教習を離した庭





十二行

本大學新築大隈講堂、圖書館及理  
 工學部を十月<sup>二十一日</sup><sub>二十四日</sub>の四日間毎日  
 午前九時より午後五時まで開放、  
 縦覽に供します。

但し  
 大隈講堂の縦覽は  
 廿一日午前九時より午後五時迄  
 廿二日午前九時より正午まで  
 廿四日午前九時より午後五時迄  
 尙御觀覽の際御尋ねの事は係員(赤菊の徽  
 章佩用)に願ひます。

昭和二年十月

早稻田大學









創立四十五年 記念式順序  
大隈總長記念講堂開館  
昭和二年十月二十日

- 一、第一鐘 (午後一時四十分) 學生入場
- 一、第二鐘 (午後一時五十分) 教職員入場
- 一、開式 幹事 難波理一郎
- 一、國歌合唱
- 一、式辭 總長 高田早苗
- 一、報告 常務理事 田中穗積
- 一、工事報告 講堂建築主任 佐藤功一
- 一、祝辭 寄附者總代 澁澤榮一君
- 一、祝辭 子爵 文部大臣 水野鍊太郎君
- 一、祝辭 校友總代 埴原正直君
- 一、謝辭 侯爵 大隈信常君
- 一、校歌合唱
- 一、閉式 幹事 難波理一郎

以上

式後來賓に大隈會館庭園に於て立食饗應

記念大競技會

同 廿一日	同 廿二日	同 廿三日	同 廿四日
午前十時 道 (第一高等學院道場) 午後二時 術 (大學弓場) 道 (第一高等學院道場)	午後二時 球 (戶塚大學球場)	午前十時 式蹴球 (戶塚大學球場) 午後二時 球 (大學相撲道場) 撲 (大學相撲道場)	午前十時 式蹴球 (戶塚大學球場) 午後二時 球 (戶塚大學球場)
柔	野	庭	庭
弓	柔	相	陸
劍	柔	式	水

入場無料 (雨天の場合中止)

記念大講演會

毎日午後六時開會  
新築大隈講堂に於て

- 十月二十日
- 文化と文明と辨證法 教授文學博士 金子馬治
  - 國民經濟前途の觀測 教授法學博士 田中穂積
  - 現代政治界の重大問題 教授法學博士 浮田和民
  - 實業 高等學院教授 會津八一
  - 記念大講堂の建築 教授工學博士 佐藤功一

- 同 廿一日
- 完成された過去の二大國民道と其調和 教授文學博士 五十嵐力
  - 電氣と宇宙 教授工學博士 山本忠興
  - 東洋文明の主格的地位 教授 松平康國
  - 休業銀行問題の法律觀 教授 寺尾元彦
  - 社會教育の趨勢 教授 北澤新次郎
  - 勞働問題に對する一考察 教授法學博士 鹽澤昌貞

- 同 廿二日
- 經濟現象の觀照と景氣循環の必然性 教授 服部文四郎
  - 自由と愛 教授 中桐確太郎
  - 古代法と近代法 教授法學博士 遊佐慶夫
  - 文藝の社會的基礎 高等學院教授 宮島新三郎
  - 進歩の要素 教授法學博士 平沼淑郎

聽講無料 (靴又は草履にて入場のこと)

(裏面を御覽下さい)



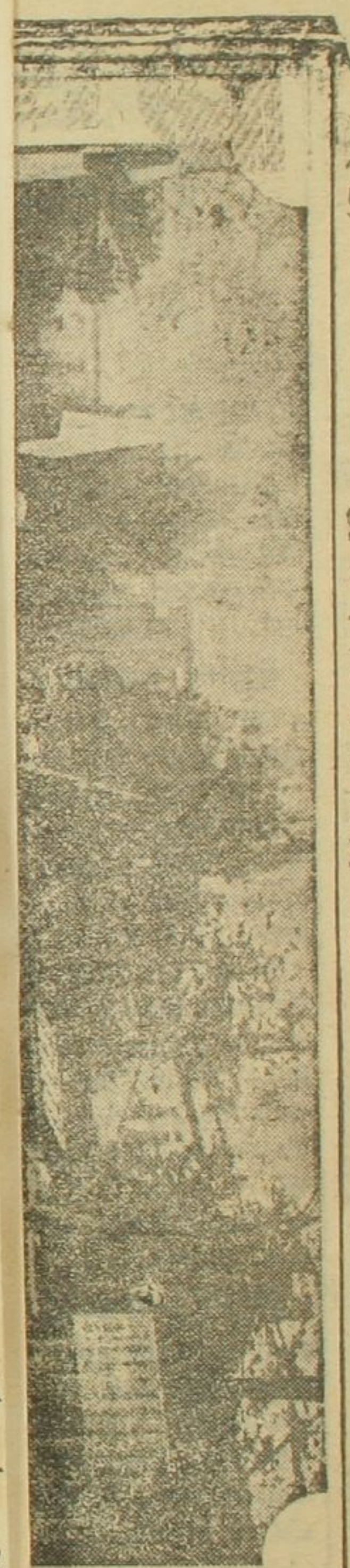


(七)

號七十八百十第 第一第

(日曜日)

附



同 廿一日

完成された過去の二大國民道と其調和  
電氣と宇宙  
東洋文明の主格的地位  
休業銀行問題の法律觀  
社會教育の趨勢  
勞働問題に對する一考察

教授文學博士 五十嵐  
教授文學博士 山本  
教授文學博士 松平  
教授文學博士 寺尾  
教授文學博士 北澤  
教授文學博士 鹽澤  
教授文學博士 眞

同 廿二日

經濟現象の觀照と景氣循環の必然性  
自由と愛  
古代法と近代法  
文藝の社會的基礎  
進歩の要素

教授文學博士 服部  
教授文學博士 中桐  
教授文學博士 遊佐  
教授文學博士 宮島  
教授文學博士 平沼  
教授文學博士 淑

聽講 無料

(靴又は草履にて入場のこと)

(裏面を御覽下さい)



















あるはる早大の郵は、  
ことかゆかゆあるか、  
すの皇がまへ、こころ  
代りなこころぬめを  
する自今風の感徳の  
おとすから切りかつこ  
おく、

の自今が出版部創主の  
てある所から、今がの  
記念品代と、しる三  
のりひあるから、  
おとすから切りかつこ  
おく、

らに見て、  
利フローレンス、  
眼刻像一基を得た、  
ヤセが、  
む、  
生けるか、  
よ、  
の、  
る、  
も、  
の、  
か、



此像を三瓶に於て見出し此の石が價三萬五千金  
 といふの記五十四回も添加して贈り入られ十月  
 廿日記



○田中光顯伯早稲田と深縁ありあるが余の國方故

長かりし時下しに事々々六朝を皇統の義疏を  
 贈らん後亦余を改法中日本古文方を贈らん又願  
 望王六朝を玉の屑を贈らん早稲田の伯に買ふ所  
 既に多し然るに伯近來惟新前後の志士貴恩  
 を蒐集すまゝに没却し漸やく蒐集集成すや早  
 稲田の伯に高し何時買を易ふ事も知んず  
 蒐集の畢後亦早稲田に病せんと其の業  
 者の志を石に刻して揚げ吾を早稲田に  
 九心余が石を贈ると余深く伯の厚意を謝して  
 且も吾大嘗大帳房にうりて建設せしむる事亦  
 維新の志士也贈らん畢後皆炭と縁あり  
 リ先大嘗の之れを花す縁固ありきりあり



田中光顯伯多し早稲田大云、字の始るは  
維新前後志士貴墨一日目録左の如し

一 岩倉具視初巻六首

一 伊藤博文七絶

一 岩下方正平自書五絶

一 井澤之五唐画

一 山本湖中唐画

一 一條忠香画

一 池田大云七絶

一 橋本左内七絶

一 橋本通七絶

一 林子平文

一 林鶴梁七絶

一 丹羽正雄短冊

一 丹羽賢歌中絶句

一 児湯部正五絶

一 錦小路頼徳懐身

一 徳川其又五一行者

一 伴林光平懐紙

一 子系都方印尺牘

一 子程五印自書五絶

一 五上黄石古詩



小澤蓋庵三首懷身

豐田天切平紙

大場一真高二卷

若江蓮子短冊

河合屏山墨歌

河合屏山短冊

鳥丸光胤短冊

河野成煥七絶

勝安房五之二句

勝安房五之三句

横井平四郎五絶

横田順宣短冊

吉田宣次中癸丑拜林禁灘心

日清物之摺物

高田長英尺牘

高崎四郎大夫七絶

高杉晋佐尺牘

武平半平太墨歌

高山彦九郎哀傷之歌七首

田中守方七絶

伊達宗城短冊

冷泉為恭画

日照短冊

信海懷身



月性詩七絕

天章七律

義堂書二行

悟庵画

晦菴七絕

月井卷詩二行

椿山画

中園模古竹五絕

永井氏卷自寫詩

中山忠光摺紙

中山三友親摺紙

去尾秋風七絕

賴三摺三印也

賴山陽画山水

村田清風五絕

村山半牧画

宇野亮多一畫画

宇野亮多松尾画

梅田雲浪尺牘

中村彝三絶七絶

中村貞琴詩七絶

大原重德自書一卷

正親町實德題冊

大橋明卷也



一 正親町三茶室受歌

一 大橋的庵七絶

一 大田垣菜園月自画淡

一 日柳菫石古的書心画

一 熊天直好柳子

一 梁川星雲詩

一 柳原前光七絶

一 山好有用七絶

一 山田亦助七絶

一 山本四郎短冊

一 山科言繼短冊

一 杉平春岳短冊

一 杉本庵之他五絶

一 杉本海三郎七絶

一 間崎折馬七絶

一 直木和久短冊

一 前田好右之門七絶

一 杉本良順畫

一 杉浦多氣志楳七絶

一 福田快平七絶

一 杉田東湖七絶

一 杉田十四介扇面

一 杉森弘彦詩

一 杉本津之他画



藤井藍田

十林氏部推大納短冊

枝吉神陽長古

秋元安氏短冊

映山歌公和歌

淡路槐堂西

淡白梅堂西

休久良東雄歌

淺命屋信平短冊

吉木秀枝短冊

朝川善吉唐七律

河宣嘉德紙

三條實業色紙

三條實美短冊

休久間象山送松蔭西

境嘉十印大洞漢

木戶孝元七絕

菊池澹如七絕

清川心中扇面

柳谷利秋書

高橋好修物吉四帖書

喜村泰村七絕

四條隆歌

品川孫次中歌



土方泰山湯
東洋河画
森五六郎七律
平野二巾雜冊
平井牧二巾七律
菱谷山歌
鈴木重胤摺紙
田布政し地湯
蓮田市巾
武田耕雲書
大場一真書
田丸橋一右書

金子孫二巾
井内百右巾
吉成文右書
寺田天切
中津門徑之尺牘二
坂本孫馬尺牘
吉村實大巾尺牘
合計 百四十四點
百三十六

而一之伯也亦志曰士う、清ふ伯の者像一幅を心  
 り伯の自漢を納つるを之れを寄野の幅とせし



倚らん。尚前月東京に來り我國者被と幼ハ  
余即ち一室に於て其の室の好むを多く  
へき幅を掲ぐる事を示す伯欣然と多而  
し。今約を復して送んたるのを見ず  
合拜する四十餘點あり。大佐の志士を包  
羅す。吾大學の考の層も可多。右三  
き余。来月初旬伯を舊原の在に訪宅  
面を表せんとし。先づ二書を授け而して来  
月十一日。ある大隈合被。全部を陳列  
し。廣く内外に示さんとす。即ち其の  
目錄全部とこゝに掲ぐといふ。十月廿四日  
○十月殊に多す。此中二三施活の執筆曰く

和宮古蹟幕末悲劇の犠牲(一月強文藝多  
部生部の為の事)古を居(文藝多  
十二月強の比る事)早稲田の今昔(武  
二列一の所感)早稲田の後の事、向く  
小巻(昔は)入就て大改ある所  
の比る事

○来月回者被デーの比る事。帝國回者被日  
比谷回者被大橋回者被の三被と被る事  
七多。新漢字の回者をえ。油心。其表  
す。余の春假。池。其一也。  
○過敵大隈合被と云。主なる余の回者  
主甚。帳者。被る事。回。○来。斯。帳



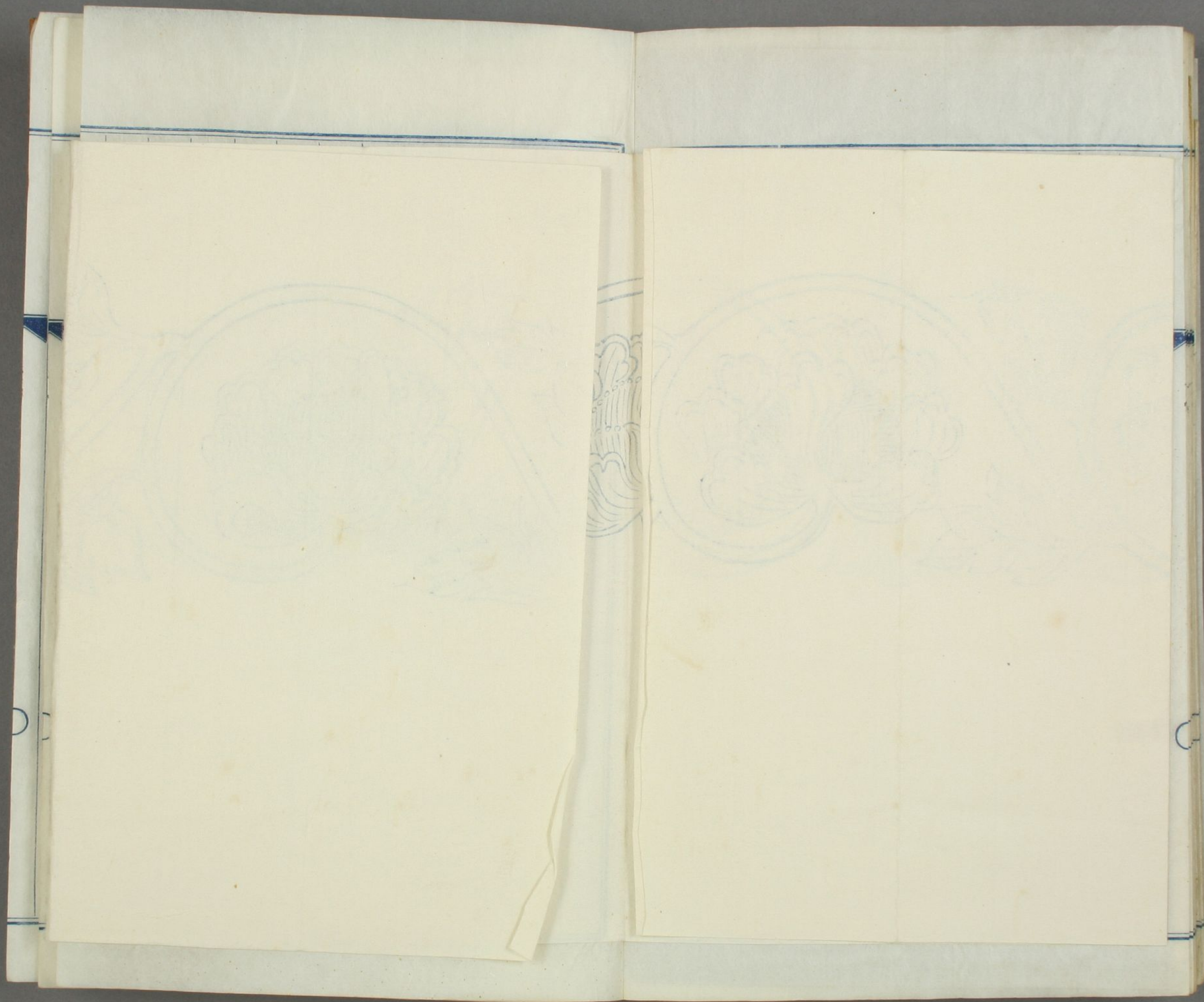
湯を足るの初めをうへ一関一欵一まんの感らしき  
 能ハズ紀念と一通藤書して家ニ存す  
 ○余がす玲本村の書房の手子ゆせしよ  
 城後の中直家二宮氏遂ニ六千四を  
 投し七婚ふ落れ四千六の山のも也  
 以四の人ニ保存せしむるハ余の本懐と  
 するも也  
 ○種々肝煎をうへしつる別夏亭  
 丹洲店に先ち徳念の合をひくく余  
 五六の人と招えんむき酒次縦横雑論す料  
 理不のるるのあつてんむも特色を欠くと覺  
 憾とす、は号するをこくまへ吾業の不利也

其物の配分をうへしつるも久跡をうへて兎角面倒  
 のこも也余が中直と誓うて手杖三千十出  
 米高のまゝに飲つちくし七亦余が楠瀬  
 日年とあまを授けをうへしつるもよ也  
 のお目と甲紙こころぬめおく

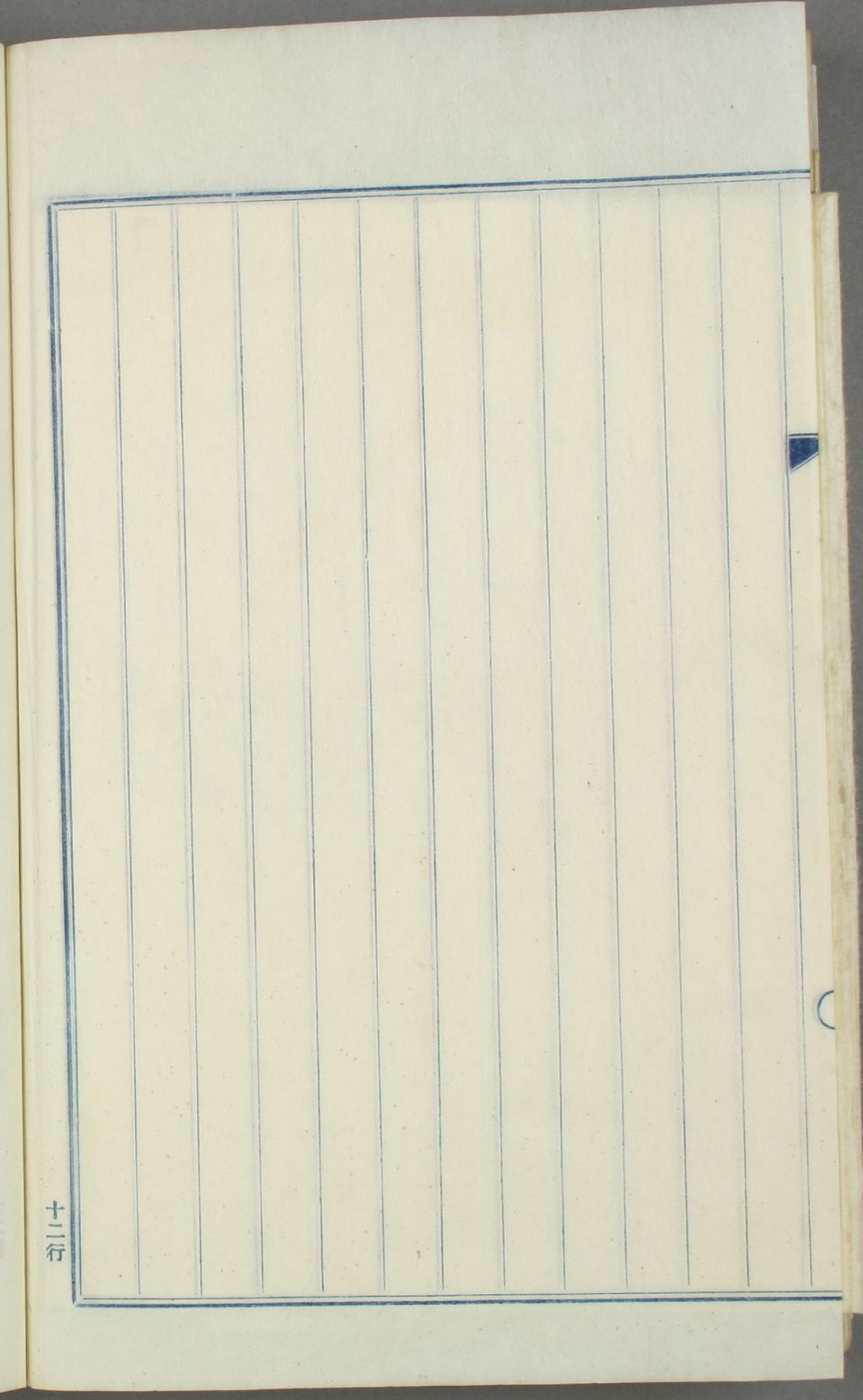
會田齋

假姓丹  
 日年表  
 去隸 匪



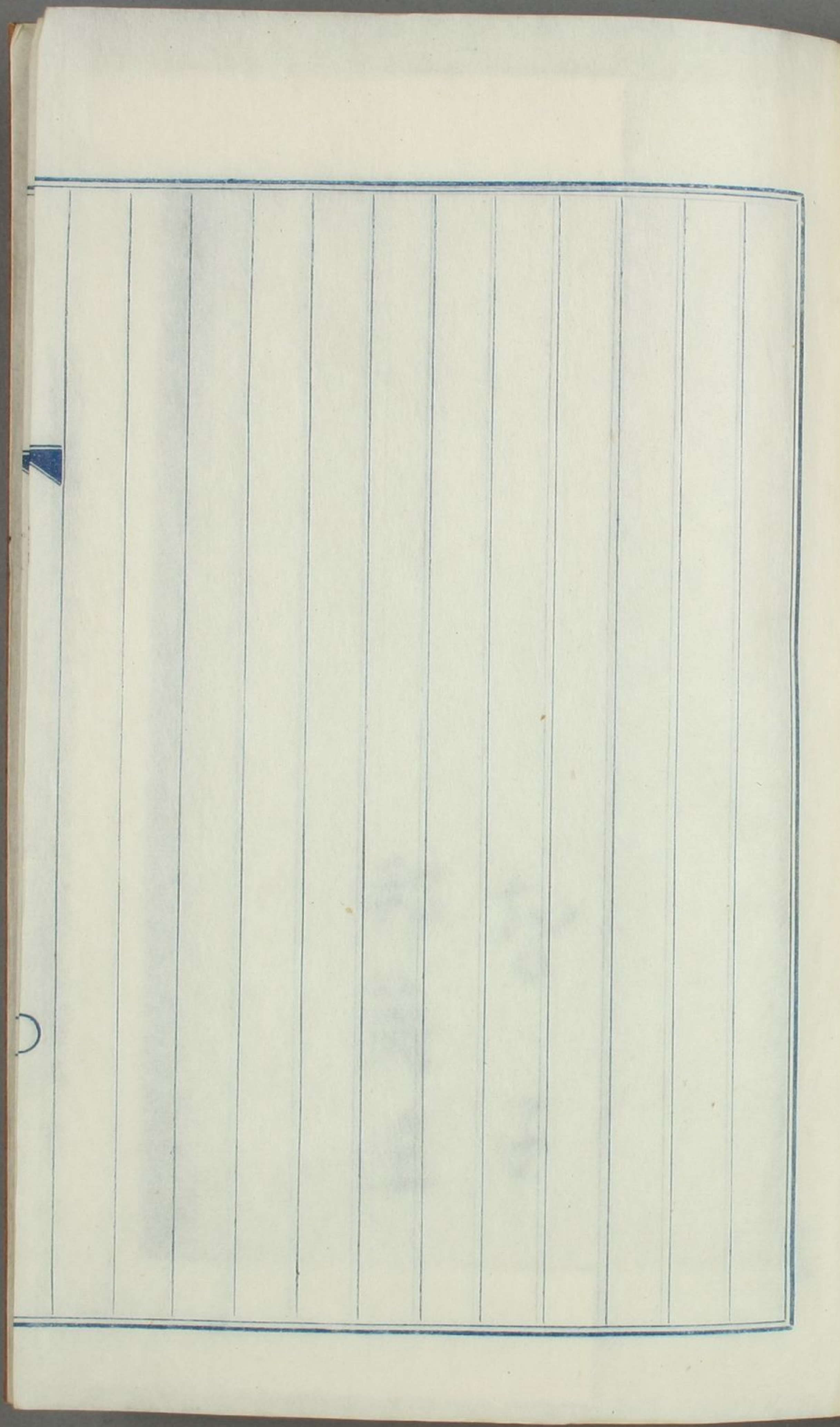




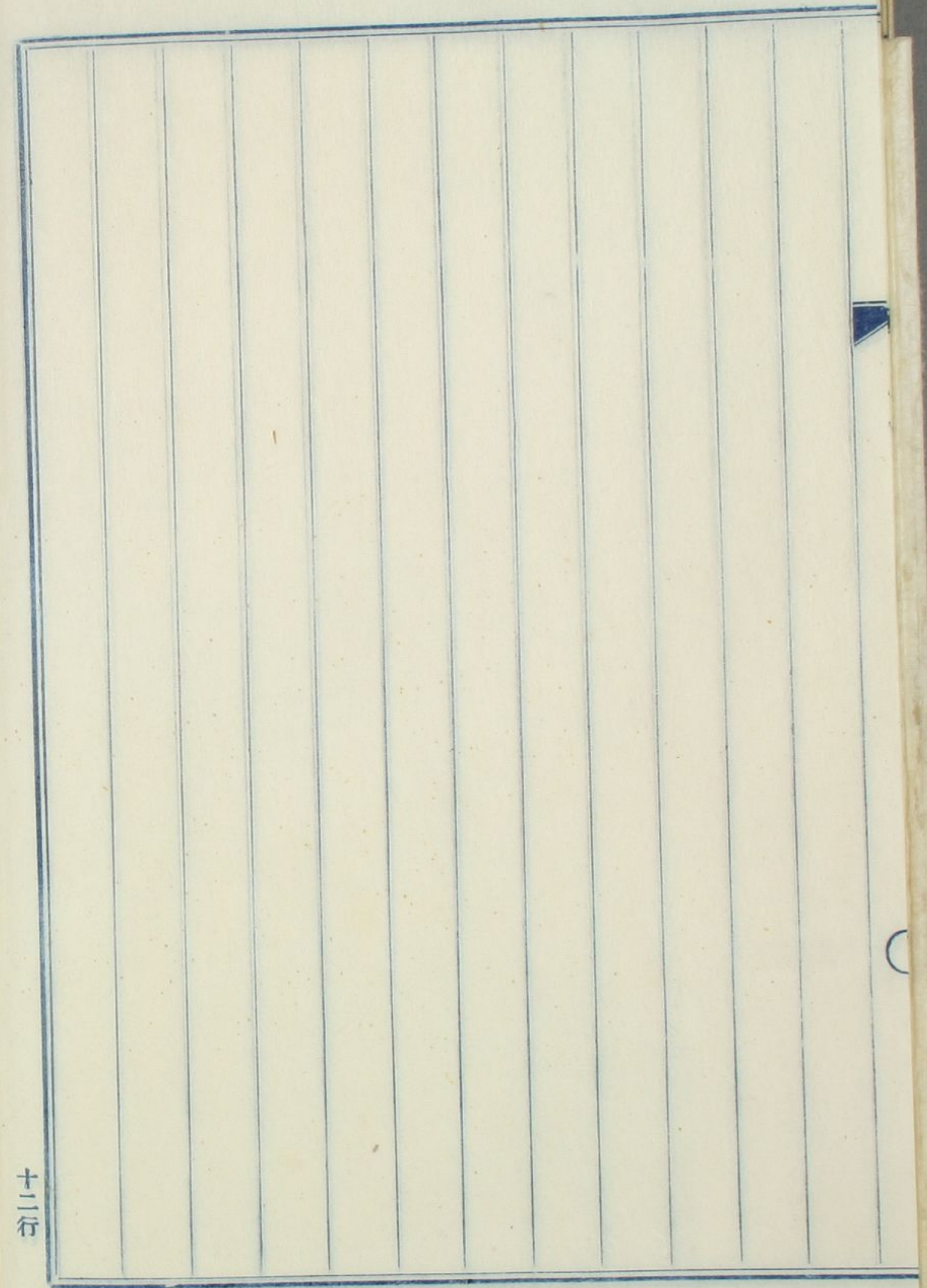


十二行





十二行









奉獻大正新修大藏經

攝政皇太子聖德法王 寶壽

彰秀王

倪子

良子

邦馳王

邦久

信子

智子

邦英王

法隆寺聖德太子寶前奉納大正新修大藏經

聖德太子三千九百零九年御奉贊會總裁久邇宮殿下御家署名







Stamps  
over  
cancel

Post  
mark  
over  
cancel



高橋草坪淡彩雪景山水 (紙本條幅)

本  
社  
藏



